

# 第7回全国バス学習研究集会

---

## 提 案 要 項

---

期 日 昭和49年10月11日(金)・12日(土)

会 場 新潟県新潟市立曾野木中学校

主 催 全国バス学習研究会  
新潟県新潟市立曾野木中学校  
後 援 新潟県教育委員会  
新潟市教育委員会

# 目 次

## ◎ 学 習 指 導 (中学校)

1. 学習に意欲的にとりくむ ..... 豊川市立代田中学校  
    集団づくり ..... 平尾 宗 義
2. 探究を進める学習 ..... 愛知県一宮市立浅井中学校  
    ..... 青木 定 久  
    ..... 樋口 貞 稔  
    ..... 臼井 哲 雄  
    ..... 山田 哲 郎
3. 別 冊 ..... 春日井市立東部中学校
4. バズ学習の輪をひろげるために ..... 尼崎市立日新中学校  
    — 子どもたちの変容を求めて — ..... 皆川 筍 三
5. 「学習する集団」 ..... 新潟市立松浜中学校  
    形成実践上の諸問題 ..... 大竹 敏 夫

## ◎ 生 活 指 導 (中学校)

1. 別 冊 ..... 高知県奈半利中学校
2. 自己指導の態度形成を ..... 愛知県豊川市立中部中学校  
    めざす生活指導
3. 望ましい人間関係を育てる ..... 兵庫県飾磨郡夢前町  
    バズ学習の実践について ..... 鹿谷中学校  
    — 地域ぐるみでとりくみの中でひとりひとりの学力を伸ばす — ..... 小林 昌 義
4. 生活指導の実践 ..... 新潟市立曾野木中学校  
    — 行事へのとりくみ — ..... 松本 欣 一

◎ 校外・地域（小・中学校）

1. 創造力を高めるバズ学習 ..... 広島県豊田郡豊浜町  
豊浜中学校  
山根 正 純
2. 地域社会と結ぶ ..... 兵庫県姫路市立高丘中学校  
全体的バズ教育体制  
浜田 宏  
伊勢田 耕 一
3. 別冊 ..... 春日井市知多中学校
4. 父母と共に成長する ..... 長崎県西彼杵郡多良見町  
バズ学習の実践と計画  
喜々津中学校
5. 部落バズ学習の実践 ..... 新潟市立曾野木中学校  
野上 弥 作

◎ 小学校の部

1. 別冊 ..... 滋賀県五個荘小学校
2. 読解学習におけるひとりひとりの ..... 姫路市立安室小学校  
思考能力をどのように深めるか  
国光 里 美
3. 自主性を育てるバズ学習 ..... 豊川市立千両小学校  
— 学習態度について —  
丸山 正 克
4. 自主性を育てるバズ学習 ..... 新潟県刈羽郡刈羽村  
— 学習指導と生活指導の統合をめざして —  
刈羽小学校  
酒井 喜久司
5. 小集団の話し合いのさせ方（別冊） ..... 新潟市立五十嵐小学校  
佐藤 孝 篤



学 习 指 导 (教 科)

中 学 校



## 第7回 バズ学習研究集会

# 学習に意欲的にとりくむ集団づくり

豊川市立代田中学校

平尾宗義

### 1 はじめに

自主性とか主体性の育成がとげられて久しいが、それは、民主主義を築き、それを支え、それを担い得るような社会成員に育て生徒たちを育てあげていくという社会的課題であり、それは、同時に、わたしたちが担うべき教育の課題でもある。しかし、この生徒ひとりひとりに、自主性や主体性を育てていくうえで大きな問題として立ち上がるのは、集団の育成の問題である。集団というのは、それが正しく機能するならば、その中で自分の考えを述べる、他人の考えをつきあわせる、そして、それとつきあわせるうえで立つて自分なりの考えや判断を表明していくといった面で、自主性や主体性の育成に非常に大きな役割を果たすのである。この考えのもとに、学習と生活の統合をめざす小集団学習にとりくんでいくのである。本校は、昨年度新設開校された学校であるという特殊事情から、仲間づくり、学校づくりを当面の課題として出発し、一応の成果らしきものをとらえることができた。その基盤に立って、本年、ようやく授業に小集団を取り入れ、研究しはじめたというところから、「体制づくり」を中心に推進している。その柱として、学習集団としての学級づくり、話し合いの組織づくり、位置づけと課題提示の三つを考え、年間計画を立て研究を進めている。しかし、研究の一步を踏みだしたばかりであり、小集団学習の素地づくりの歩みと問題点を報告するのみである。

### 2 本校の実態

昨年度新設校として誕生した本校には、市内の2校の中学校から分離してきた2・3年生と、2小学校から新入生として入学してきた1年生の生徒たち、あわせて460名が集まった。いわば寄せ集め世帯として出発した。

さらに、この地域の世帯主の出身県が33都道府県にもおよび、県内出身

者は64.3%にすぎない。しかも、校区出身者は、全体の20%にも満たないという地域社会の特殊事情をまかねあわせている。こうした点に大きな困難点を感じつつも生徒たちの不安をとりのぞき、生徒たちの期待に答えるために本校教育目標「共につくる喜び」—— かしこく・豊かに・たくましく—— をあいことばに教育実践の第一歩をふみだした。

### 3. 学習集団としての学級づくり

#### (1) 仲間づくり・学校づくり

昨年度は、新設校であるということから、まず新しい校風を樹立し、栄えある伝統のページを築くために、全校体制の中で、新しい仲間づくり・学校づくりに着手した。その場として、自主活動の時間を産みだし、その積極的な運営を通して生徒たちの学校生活をより楽しく、豊かな、うるおいのあるものにつくりあげてきた。「生徒たち、ひとりひとりの力を結集して、すばらしい仲間をつくり、生きて働く学力をつくり、たくましい体力をつくる」という目標にそつべく各種の活動が展開され、ある程度の自主性が培われ、集団としての高まりを見せたものの、各教科の学習の態度なり、姿勢といったものとなかなか同一のものとなっていないという問題が残り、大いに、反省し、検討を加えた。そこで、本年度は、従来のように自主活動を進める一方、授業の中により積極的に小集団をとりいれ、その効果をおよぼすことを念じ、研究に着手したわけである。

#### (2) 黒板日記・グループ日記・学年通信

黒板日記は、耳新しいことばであろうが、本校では多くの先生方が、その実践を続けている。黒板日記というのは、その名の如く、毎日、教師が黒板へ書く日記である。生徒の帰った、暗く、静まりかえった教室の黒板に、生徒ひとりひとりに想いをよせながら、ある時は学級全体に、ある時は生徒個人に対し、叱つたり、激励したり、また、喜ぶあつたりして対話を重ね、生徒と教師の人間関係を、生徒の人間形成をねらったものである。この黒板日記を毎日書き続ける教師にとってみれば、それはたいへんな労力であるが、教師の心を生徒に感じとらせ、生活に、学習に生かそうとする努力は大いにまぐられるものと信じている。

グループ日記は、教師が生徒をよく知ることはもちろん、その生徒の生活への姿勢づくりに重点がおかれている。考える人間を育てると同時に、仲間意識を育てるのに重要な働きをする。

学年通信は、1年「つくし」、2年「根っこ」、3年「きづな」と、それぞれ

名づけ、毎週1回発行されている。各担任がそれぞれ分担し、学校・家庭における生活・学習全般に関する意見を述べたり、生徒や父兄からの声をのせたりして、生活・学習態度の向上、学級間の相互交流、父兄への啓もうなどに成果をあげている。

これら黒板日記・グループ日記・学年通信は、授業の直接の場での指導ではないが、小集団学習が効果的になされるための素地をつくることに大きな役割を果たすものである。

#### 4. 話し合いの組織づくり

「話し合い」の学習をとりいれることにより、従来の授業ではあまり問題にされなかった話し合いのための態度づくりが重視される。よい発言をする、自分の考えと対比し、まよひながら聞く、必ず反応を示す、失敗を笑わないという基本的な指導を行なうと同時に、授業そのものへの構えということから「学習に関する7か条」の徹底をばかっていた。しかし、学習への心構えの不徹底やリーダー養成の問題と話し合いの位置づけ、課題提示ともかかわって、話し合いの組織は十分といえる状態になっていない現状である。

#### 5. 授業の中での位置づけと課題提示

小集団を研究する上で特に重要なことは、授業における小集団学習の必要性、つまり、どうしてもこの場面や、こういう課題で話し合わせたいのだという必要にせまられた上での適切な位置づけである。

そこで、私たちは、担当する教科をとおして何を生徒にのせむのか、その教材のねらいは何であるか、どんな授業のあり方をめざしているのかをけっさり認識しなければならぬ。その上で、教材そのものの本質的な価値の追求と、何を考えさせ、何を理解させるかを明確化し、どこでどのように小集団を位置づけるのが能率的であり、効果的であるかを考えなければならぬ。したがって、従来の一斉授業より、授業の構造は複雑になってくる。

また、小集団の基本的活動の場である「話し合い」が成功するか否かは、位置づけと同時に考えるべき課題提示によるところが大きい。課題は、指導目標 → 素材の教材化 → 課題 → 授業という側面に位置づけられ、授業の流れを強力におし進める原動力となる。原動力となるべきよい課題を提示できることは、教師の教材研究の深さと綿密さであり、それをなしておえる学問的背景である。私たちは、よい課題が提示できるように不断の努力を積み重ねていくことが大切である。

さらに、この課題が、生徒を矛盾場面に当面させることにより設定された

ものであり、質的にも、適度な抵抗をもち、次への課題に発展するようがそのものである時、生徒は、だまっていたとしても、学習意欲を喚起され、話し合いは積極的になり、小集団学習は自から活発に行われ、成果も期待される。

このように、位置づけと課題提示は、その授業の成功不成功につながっているといえる。

## 6. 今後の課題

学級全体が活気にあふれ、楽しく、協同的、意欲的、自主的にとりくむ授業でありたいとの願いから、小集団を授業の中にとり入れ、始めてみようとの考えから出発したものの、あまりに数多くの障害が山積している。そこで授業の本質に立ちかえって小集団学習を考えるとというフィードバックを余儀なくされた。9月には、昨年同様、宿泊研修会が計画され、その場で、各教科ごとに、現状における問題点と指向すべき方向が話し合われ、本校の授業像がまとめられていった。そして、これをもとに、教科部会で具体的な解決策をさぐっていくことになっている。今後、この原点からの出発に、大いに期待をかけたいところである。

このように、私たちは研究の一步を踏み出したばかりであり、小集団学習を効果的にするいろいろの技術的なことは、何一つ知らないが、授業実践を通してひとつひとつ解決していきたいと思う。小集団学習を始めて、最初につきあたり、解決を迫られている課題を次にかけ、道標としたい。

- (1) 生徒の自主的、主体的な学習活動を組織していく指導性を教師がもつべきである。
- (2) 授業を受けるのに必要の態度や技術を身につけさせるよう、訓練をしておくべきである。
- (3) 構造化された教材の指導過程を考えていくべきである。
- (4) 適当な困難度による矛盾の構成が課題設定にくふうされるべきである。

第7回全国バス学習研究集会

主題 探究を進める学習

---

愛知県一宮市立浅井中学校

青 木 定 久  
樋 口 稔  
臼 井 貞 雄  
山 田 哲 郎

## はじめに

戦後、日本は急激に復興をし、世界から注視されたが、現在、日本人はエコノミックアニマルと呼ばれて、世界から孤立しかかっている。これは日本人に自律心が欠けていることに他ならない。他人のことを考えず、自分のことだけを考えて、ただひたすらにつき進んできた30年の成果がこれである。

現代の日本人に一番欠けているもの、それは自主性ではないだろうか。真の自主性とは、他人のことをも考えて、すべて自己の力ですることである。すなわち、自律性という言葉を含んでいる。

他の人と協調し、自ら進んでやるという学習を進めるには、教師が押しつける一斉学習では困難があり、小集団による、生徒自らが討論をし、問題を解決していくという探究学習が最良と思われる。かといって、一斉学習を否定しているのではない。一斉学習の方が効果的な教材もある。

人間がこの地球に誕生した時、走るのは遅いし、泳ぐのも、木に登るのもへた、飛ぶこともできなかった。この人間が外敵から身を守り、現在みたいな物質文明の社会を築くことが想像できただろうか……。

人間が地球を征服できた理由は二つある。

まず最初は、考える能力があった。二つ目は、協力し合ったことである。

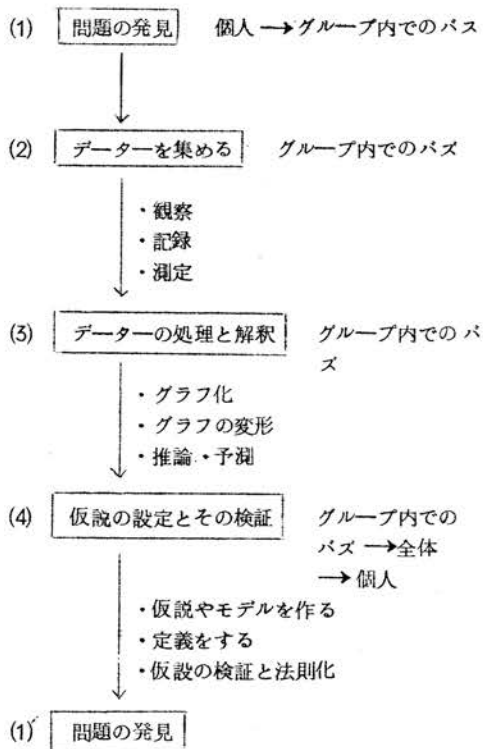
人間は適であるライオン等に対して集団でむかっていった。初めのうちは素手であったろうが、石を手に持ったり、木の先に石をくくりつけたり、また遠くからこれを投げたり、弓を考えたりしただろう。

必要に応じて、また疑問に思っただけで科学は発達してきた。

現在の科学技術の発達はずさまじく、情報量は莫大であり、これを全部生徒に教えることは不可能である。だから現代を未来につなぐ教育は学び方を学ぶ学習以外にはない。

本校では、これらの事柄をふまえて、他の人と協調し、自ら進んで学ぶという自主的な学習を進めるために、小集団による探究学習をとり入れた。

## 1. 本校の理科学習の進め方



本校を進めている理科学習の概要である。学習を進める順序は必ずしもこのままとは限らずもとへもどったり、修正しなければならぬこともある。

たとえば、問題が簡単であれば(1)の問題の発見から、(4)の仮説の設定とその検証へ行くことがある。何度かこの方法をくり返しているうちに自然とこの方法が身についていく。

「学習とは学習のしかたを学ぶこと」ということばがある。科学の成果を知識として、覚えこむにはあまりにも知るべきことが多い。こうした学び方の学習を通して、自分の手で発見をし自分のものにしていく、すなわち自主性を育てることになる。

この方法で学習を進めていくと、生徒自身が次時になにをやるのか各自が理解し、始業合図とともに教師がいなくてもグループでの活動がはじめられ、自主性を育てる源動力になる。

## 2. 中学校3か年を見通した指導

生徒に探究学習をさせるためには、その方法として、次の三つの型が考えられる。

(1) 探究のための問題を提示するとともに、データの収集、データの処理と解釈を教え法則性を考えさせる。

(2) 問題は提示するが、それを解決するためのデータの収集、データの処理と解釈を生徒たちに企画させ、法則性を考えさせる。

(3) 問題の発見も生徒たちにおこなわせる。しかし(3)の段階を、中学1年生がとれるものではない。やはり中学校3か年を通して、(1)の方法から探究の手順になれさせる必要がある。

本校での第1学年については、上記の三つの型の中の(1)の方法を通して、話し合いの基本になる討議のしかた、器具の基礎操作の徹底やデータの処理と解釈の観点などを重点に、より高次の探究ができるよう、その基盤づくりをめざしている。

第2学年については、(2)の方法を通して、第1学年での話し合い活動、基礎操作を十分に利用しての実験方法の工夫、企画に、またデータの処理と解釈に重点をおき、第3学年への基盤づくりをめざしている。

第3学年については、第1学年、第2学年の基盤の上に、最終目標である、自ら疑問を求めて、自らそれを解決していく自主性のある生徒づくりをめざしている。

## 3. 話し合いの進め方(基本例)

生徒自身が自らの手で問題を解決していくためには、一人一人が問題意識をもち、真剣に考える必要がある。十人十色といわれるように考え方もちがう。自分の考えがいつも正しいとはかぎらない。何人もの考えをだし合いよりよい考えにするためには、個人よりグループ、グループよりクラス全体の話し合いが必要になる。

しかし、各個人、各グループが勝手に話し合いをはじめれば、グループ、クラス全体の意見がまとまらない。そこで生徒間の約束(ルール)を決めておけば、その心配はなくなる。しかしその約束(ルール)は絶対的なものではなく、生徒にとって不必要なものであれば、削減し、また必要にせまられればつけ加え、そのクラスの状況に応じて変化させらるものとする。

(1) 話し合いの基本訓練事項(徹底的に指導する)

### ① 個人思考

・ 問題を真剣に考え、自分の意見をはやくまとめノートに記録する。

### ② グループ討議

ア、司会者の指示にしたがって自分の意見を発表する。

イ、司会者は問題点を整理して、グループの考えをまとめる。

ウ、まとめた考えをT、Pに書く。

エ、T、Pは色わけをしたり図や表を用いてわ



かりやすく書く。

③ 発表のしかた

ア、意見の発表は、先生にかえずのではなく、みんなの方をみて、みんなにかえす。

- ・「……と思いますが、みなさんはどう思いますか。」
- ・「……と思いますが、ほかの班ではどうですか。」

イ、発表はことばだけでなく、T P に書いて O H P で発表する。T P に書けていなければ、書きながら発表する。

ウ、図やモデルをさし示して、わかりやすく発表する。

エ、発表の機会は、自分だけのものにせず、ほかの友だちにもゆずる。

④ 発表のききかた

ア、発表者の方をみて聞く。

イ、相手の意見は批判的に考える。

ウ、自分の意見と比較しながら聞く。

⑤ 全体討議

ア、意志表示は、つぎのハンドサインをもって表示する。



イ、司会者は、質問、つけたし、反対の順に指名する。

ウ、わからないこと、理解できないことは理解できるまで質問する。

エ、つけたし、反対意見は、O H P を用いて発表する。

⑥ クラスのまとめ

(2) 話し合いの進め方 (具体例)

① 提示された問題 } を個人→グループで話し合う。  
自分たちでみつけた問題

○ 個人で問題を考えたのち、グループの司会者によりグループの意見をまとめる。

- ・司会者 (輪番制にする) 「……の問題についてグループの意見をまとめたいと思いますので、個人で考えたことを発表してください。Aさん。」
- ・A 「……と私は考えました。」
- ・司会者 「Bさん」
- ・B 「……と私は思います。」
- ：
- ：

グループ内でのパス

- ・司会者 「私は……と考えます。」
  - ・司会者 「AさんとCさんの意見は同じだと思いますが、Bさんの意見と対立しています。おたがいに質問、意見があったら、してください。」
- と話し合いを進め、グループの意見として T P にまとめる。

② 発表する

クラス全体のパス

○ グループで話し合ったことを発表する。たとえグループ内での話し合いが途中であっても話し合いができたところまで発表する。

・話し合いが終わっていないと発表しないグループがあるが、それはいけないと考える。なぜなら、話し合いというのはみんなが参加して話し合いねりあげて一番いいものにしていけばいいのであって、はじめの発表から完全な発表を望んではいない。たとえ考えが途中であってもそれにほかの人がつけたし、ねりあげ正しいものにしていけばいいのである。

○ 各グループとも必ず T P にまとめたものを O H P でうつしながら発表する。

○ 語尾は必ず「……と思いますが、ほかのみなさんはどう思いますか。」 「……と考えますがほかの班ではどうですか。」で結び、先生に回答するのではなく生徒の方をみさせ、生徒にかえす。

③ 発表を聞いた生徒は、自分の意見をまとめて意志表示をする。(全員がする)

クラス全体のパス

- 意志表示は、ハンドサインを用いる。
- ・発表者の意見のわからない時は、質問のハンドサインを。
- ・同意見の時は、賛成のハンドサインを。
- ・もうすこし、つけたしたい時は、つけたしのハンドサインを。
- ・反対意見の時は、反対のハンドサインをする。

④ 発表者 (司会者) は、意志表示をみて、質問、つけたし、反対意見の順に指名し意見をうける。

○ ここでの話し合いは、グループ内での



- パズと同じ形式をとる。
- クラス全体のパズ
- 発表者（司会者）は、意志表示の中で質問をあげている人に最初にあて、わからないことを理解させるまで説明する。
  - 質問の人が終れば、つきにつけたしの人を指名し、意見のつけたしをおこなう。
  - 最後に反対意見の人にあて、反対意見を聞き、賛成意見の人と話し合いありあげてクラスのまとめを導く。

⑤ クラスのまとめ

話し合いの探究の過程は、個人 → グループ  
→ 全体 → 個人にもどす。

4. 指導効果と問題点

学習の主体を子どもの手へ!! ということで、私達は現在の授業方法を工夫した。本校の探究学習について、生徒にアンケートを取った。その結果を示す。

生徒中心の授業が良い	204人
一斉授業が良い	18人
わからない	16人

(1) 良い点

- ① 理科が好きになった。
- ② グループ意識が高くなり、助け合う、教え合う、かばい合う、行動が多くみられるようになった。
- ③ 気楽に話し合うことができ、発表が活発になった。受身でなく、自分から進んで意欲的にやるようになった。
- ④ 話し合いの技術が進み、ものおじしなくなった。
- ⑤ 教師に時間的なゆとりから、個別指導ができ、落こ者がすくなくなった。
- ⑥ 相互の助け合いによって学習するので、落こ者がすくなくなった。

○ 考察

①について一年生で調べてみると四月の調査では242人中72人が好きと答え、九月の調査では242人中163人が好きと答えた。この調査からみても明らかに進歩している。小学校と中学校のちがいが、教材の種類、教材内容のむづかしさなどの要因で多少の変動はあると思われるが、授業形態が一斉より、生徒中心の授業の方が理科が好きになっている。

②については、協力し、相互に他人を認め合う行

動がみられ、自律性が身についてきた。

③については、学級会などでも効果があらわれている。すべての活動が、話し合いのルールにしたがって行なわれるので、要領も良くなり、スムーズに進み、発表も自信に満ち、活発になった。

④については、話す機会が多いので、言葉の数も多くなり、要点をおさえ、順序よく話せる生徒がふえた。

⑤については、生徒中心の授業では、教師の自由な時間が多いので、生徒個々の活動がつぶさに観察でき、個別の指導も可能になった。

(2) 問題点

① 生徒のあげた問題点

- ア、無駄口が多い。
- イ、授業がちっとも進まない。
- ウ、発表者が特定の人にかたよる。
- エ、ときどき個人攻撃になる。
- オ、生徒だけでは、わからないので、ある程度先生の意見や指導もしてもらいたい。
- カ、無口の人、しゃべるようにして、生徒全体で話し合いたい。

② 教師のあげた問題点

- ア、極端に能力の低い生徒は、いかに指導していくか。
- イ、生徒の活動中教師はいつ助言するか、タイミングがむづかしい。
- ウ、学習のルールやしつけをいかに徹底するか。
- エ、教材をいかに精選し、組織化するか。
- オ、評価はいかにするか。

○ 対策

①アについて、授業に積極的に取り組まないのは生徒が問題意識をもっていないからである。

生徒の発達段階を調べ、発達の方向を予測し、生徒のレベルにあった、教材を組織化して与えてやるというのではないだろうか。そのほかしつけや学習のルールをしっかり指導しなければならない。

①ウ、①カについて、発表は表現力の優れた者が、最初発表し、劣っている者は、発表内容の整理の仕方や発表の方法など、優れた者から得るように努力させ、徐々に機会を与え、簡単な内容の発表から、複雑なものへと入っていく。

グループのものが発表者をもりたてるようにして、自信をつけさせる。全員が必ず発表するよう、輪番制も一方法である。

5. これからの研究の方向

(1) 基礎操作

探究学習をするには、どうしても基礎事項として、実験器具の基礎操作をみのがしてはいけない。

生徒自らの手で実験をするには、実験器具を正しく使用できなければいけない。そこで実験器具の使用説明書を生徒全員に配布することにした。

(2) 発表できない生徒の指導

自分ではまとまった、考えをもっているが、人前ではどうしても発表できない生徒がいる。(特に女子が多い)

多くの生徒が自分の考えをだし合って、はじめて、よりよい考えになる。このような生徒を今後どうするかが、大きな問題である。

(3) 評価

探究学習を実践していくには、学習指導とあわせて評価を無視することはできない。その評価方法として、生徒の学習する探究過程をいかにテストするかが、大きな問題になる。

最近、パフォーマンステストなどいろいろ工夫されているが、まだ本校は研究をはじめて日が浅く、実施にいたっていない。

(4) 教材の精選

教材が消化できない。理科を担当する多くの教師の悩みである。教材の構造化をはかり、どの単元のどこで探究学習を展開させるかを、重点的にえらびだすことがこれからの課題である。

おわりに

本校の理科のねらいは、生徒の自由な発想を効果的に生かして、さまざまな探究の過程を通し、未知の問題を生徒みずからの手で発見し、解決することである。

そしてその時の感動と喜びを学習するものに与えてやりたい。

## 第7回全国バズ学習研究集会

バズ学習の輪をひろげるために

——子どもたちの変容を求めて——

尾崎市立日新中学校

皆川 菊三

### 1. はじめに

本校は昭和41年度並に42年度、「情報教育研究校」として市の指定を受け、京都大学教育学部長 齋坂先生のご指導のもとに研究が進められた。即ち第1年度は、「美しい環境を求めて」という研究テーマで、第2年度は「学習のよろこびを求めて」というテーマをかがげて発表したものであった。

親も子どもも受験目あてに一喜一憂し、お互いに競争心をあおる無味乾燥なつめ込み的学習指導を改善してこそ教育正常化が期待されるのであり、情報の高まりも期待できるのである、ということが真剣に討議された。

与えられた枠の中だけの徹底的な学習ではなく、自ら発見し、共に思考し、解決に到達した成功感や、感動の経験を積み上げる教科指導を考えていこうとしたわけである。即ち教科指導における豊かな情報に培った基盤は生徒自らが、「学習した」という満足感と、無限の喜びを支えられた授業のゆえに存在するものであり、従来の一斉指導の上になつて自主協同性をかまえた小集団学習(バズ学習)の効果的な生かす方を考えたわけである。

### 2. 小集団学習の研究の経過と実践

研究発表後も多数の教師の取組みにより、バズ学習の成果をあげて

きたが当時の教師も殆ど転任し、何時しかバス学習も忘れられる、ただ一部の教師が教科独自の小集団を編成して実施してきた。学級担任の助言はあったとはいいながら、最も大切な班編成に担任の意志が十分に反映されず、その上始業前の席替りの煩雑さのために、子どもたちも落着きを欠き、バス学習の目的を果すことが出来ない状態となった。

たまたまバス学習の研究者として造詣の深い前田校長を迎え、そのご指導のもとに、バス学習の研究も深める機会を得たのである。けれどもその間においても、学級担任多数の理解なくしては、バス学習の効果を期待できないことも痛感した。

### (1). 学年教師の理解、(1年)

高度経済成長と情報化時代は、青少年の非行化を益々増大し、本校においてもその例外ではない。

「中学生らしい生徒」は中学1年の入学当初より取組むことが最も効果的であり、又教師としての責務であるとの意見が表され、そのことについて度々学年会が持たれた。

### (2). 生活指導

#### ア. 履のしおり

学校生活のみならず社会生活においても是非穿ってほしい履のしおり項目を送り、学年教師が担任の有無を超越して一致団結生徒の指導に当ろうと約束した。

#### イ. 生活バス編成

生活指導面での問題解決も生徒自らの手で自主的に解決することこそ、教育本来の姿であろうとの理解のもとに、班活動に取組むことになった。

- . 班編成、 色々な方法が考えられるが結局担任に一任。
- . 編成する人、 担任と生徒との相談による。

- 、編成期間、 学期毎に2週程度、
- 、班の役割、 班長、副班長、発表係、連絡係
- ウ、集団活動、

○、グループ日誌

- ・ 記入は班員毎日輪番制
- ・ 内容は、班員の学習態度、生活態度、  
学習係に対する注文、  
一週間を振り返っての反省、  
各係の活躍状態、  
その他の連絡事項、
- ・ 担任の助言 毎週火曜日提出、

○、班長会議 毎週金曜日の放課後、

来週の学級活動の議題の選定及び担任より班長の指導

(3)、話し合いや発表における学習訓練、

ア、声量のしつけ、

- の声-----ロカとじる
- 1の声-----と存りの人だけに聞えるように、
- 2の声-----班の人たちだけに聞えるように、
- 3の声-----組の人みんなに聞えるように、
- 4の声-----教室のどろどろまで聞かせる声、
- 5の声-----外で出す声、

イ、話し方のしつけ、

- ・ 指名されたら-----「ハイ」の返事、
- ・ 発表するとき-----「〇〇です」
- ・ 分らないとき-----「分かりません」
- ・ 賛成のとき-----「僕は(私は)〇〇だから賛成です」
- ・ ちがう意見のとき-----「僕は(私は)〇〇と思います」

## ウ. 話し合いのルール.

- ・ 分らなかつたら聞け、聞かれたら答えよ、
- ・ 「やめ」と言ったら、教師の方を向け、
- ・ 学習と無関係な声を出すな、
- ・ 必要以上の声を出すな、

## (4) 一学期の成果、

一学期を経過したばかりの現在、目立った生活面の変化は見られませんが、集団の話し合いが活発になり、発言の量や質の高度化と共に、自主的な生活態度が身につきつつあることは、グループ日誌からも伺い知ることが出来る。

## ア. グループ日誌よりその一鱗

- ・ 体育の時準備体操を真剣にしてほしい、
- ・ 自分だけが分っててもいけない、尋ねたら教えてほしい、
- ・ 指名されたらはっきり返事をしてほしい、
- ・ 学級文庫に不用の本を寄付してほしい
- ・ 〇〇さんはいつも一人ぼっちだ、友だちになろう、
- ・ 〇〇君の発表はとこもよかったと思う、
- ・ グループ内で注意しても聞かない人がいる、班でもっと話し合えなければいけない、
- ・ 道徳の時間、時々図書室を利用させてほしい、
- ・ カバンは所定の場所へ置いて下さい、

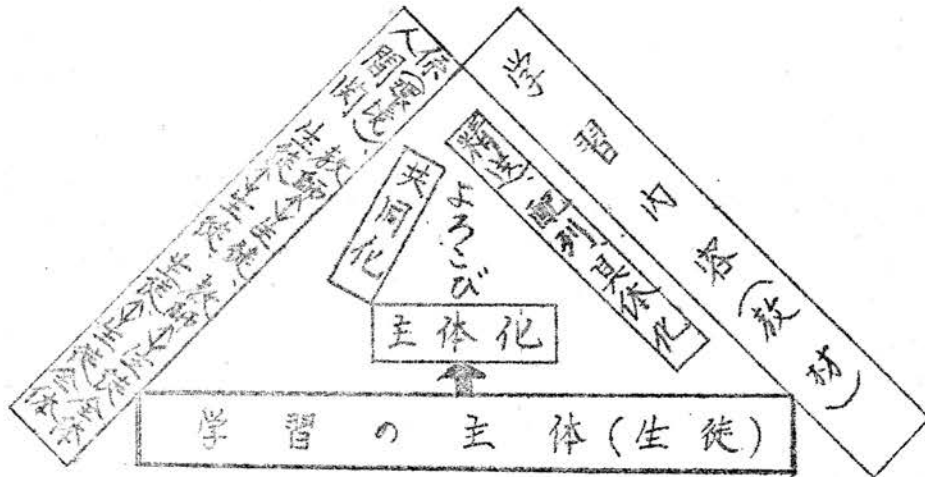
## 2. 生活バズ即学習バズ

生活バズによる生活指導で、学年教師会連の理解のもとに水集団活動が取り入れられたことは一大進歩であると思う、しかし現代社会に対応できる人間らしい人間を目指すとすると、生活集団即学習集団が好ましいと思う。

### (1) 学習集団



教科指導で最も大切なことは人間関係の保持に自主協同の理念をふまえたものが集団学習であって、教育の基本とも考えられる、「話し合い」を中心に、協同で考え、深め、積極的に教師に話しかけ、要求し、学習の深化をはかり、理解認識を深め、助け合うことにより人間関係をより深くし、やろうとする気持を持たせ、ひいては「学習のよろこび」を心から味あうことができるのである。



(2) 現在の班構成から。

1年の班構成を見ると、教師-任どしとも生活指導を中心として考えられているために、生徒中心の「仲よし集団」、「抽せん集団」の何れかど、或る班は学力優秀者をもって占められ、又或る班は学力遅進者をもって占められている状態で、課題の討議、理解認識の面からの話し合いが十分に行われず、バズ学習としての機能が達成されず行き出しの状態である。

4 教科指導(数学科)における小集団学習の実際とその考察。

私たち数学科においても、「学習の主体性を生徒の手にかえそう」の目標のもとに、授業研究をはじめたのである。

(1) 学力の定着度を見究める。

ア. 調査1.

○目的、既習教材(3年の数式)の問題を一斉クラスと、集団クラス  
 についての理解度をしらべる。

○対象、3年C組(小集団学習実施)  
 3年G組(常規一斉学習実施)

③ C、G組は5月の中間考査でほぼ同じ成績のクラス

○結果と考察(問題別正答率は省略)

項目	正答率	
	Cクラス	Gクラス
因数分解	55.8	49.7
分数式	33.3	▲34.4
二次方程式	58.2	55.4
三元方程式	52.4	40.5
二次関数	64.7	52.8
平均	55.0	48.9

比較的難解なぞくする問題については一斉クラスがリード  
 していたことに注目したい。

(2) 調査 2.

○目的、学習直後(二次関数)において一斉クラスと小集団クラスに  
 ついて、その理解度をしらべる。

○対象、3年E組(小集団学習実施)  
 3年G組(常規一斉学習実施)

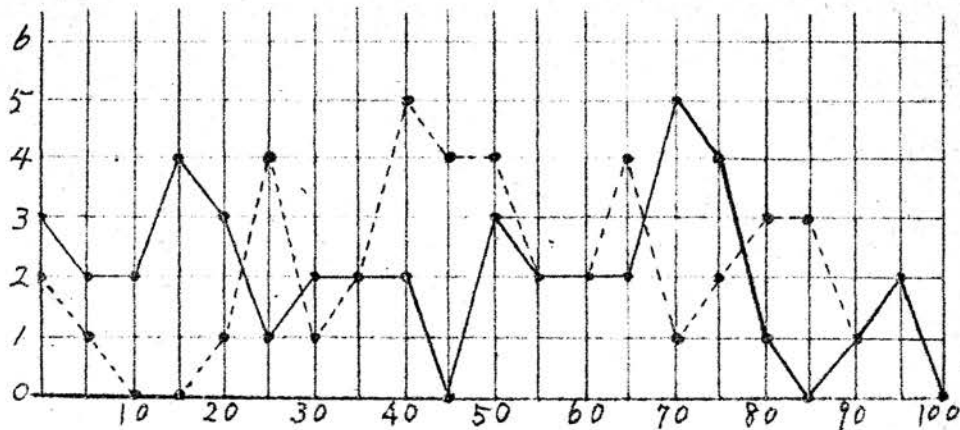
③ E、Gは小集団学習前の中間考査において、ほぼ同じ成  
 績のクラス。

○結果と考察、

得点比較グラフ

----- 小集団学習クラス <平均51.7>  
 \_\_\_\_\_ 一斉学習クラス <平均44.3>  
 ———— b ————





中位群の成績のものは小集団クラスに多く、また下位群の成績のものは一斉クラスに多く占められている。すなわち平均点のひらきもこれが因となっている。

結局この分布では、小集団学習の中以下の成績のものは思慮があるが上位者に対する指導が問題となっている。

短期間におけるバス学習の成果とは言いながら、以上のような定着度を見きわめることができ、意を強くした。

### (3) その他の学習効果。

- ア、「生徒の発問内容から」教材内容の掘下げが行われた。
- ・ 「発言の内容態度から」自分の問題として取り組んできた。
- イ、個人の思考を集団の中で高めた。

(個人の発言) (集団討議の発言) (思考が高まった発言)

### ウ、自主協同学習意識

- ・ 積極的な質問が出来るようになった。
- ・ 友人の発言をさらに発展させるような発言が多くなった。
- ・ 整理要約した発言が出来るようになった。
- ・ 思考の飛躍が少なくなった。

エ、討議に一定の秩序がみられた。

オ、話す態度、聞く態度に秩序が保たれた。

## 5. まとめ、

以上のような私のつたない体験を通して次の提案をしたい。

- (1) バズ学習も生活バズだけでは効果が少ない。どの様にして学習バズに志向させるべきか。
- (2) バズ学習の基本的訓練をどの様にしたらよいか
- (3) 発達のしかたとバズ学習のかかわりあいは、どうあるべきか。
- (4) 教科の本質を失かしたバズ学習のあり方はどうあるべきか。
- (5) 集団の中で、できない子どもをどのようして学習に参加させるか。
- (6) 優秀な子どもを運ぶのばす手だてではないものか。

以上

## 第7回 全国バズ学習研究集会

# 『学習する集団』形成実践上の諸問題

— とくに教科の学習-指導における困難点について —

新潟市立松浜中学校

教諭 大竹敏夫

### 1. 研究実践の概要(経過)

(1) なぜ「集団学習」に取り組むようになったか。

松浜中学校は、職員数21名、12学級という中規模校である。校区は、阿賀野川河口右岸のかつて漁村として栄えた地域である。昨今沿岸漁業の不振から専業漁家は数えるほどしかなくなり、工場や住宅団地の進出により急速に様相をかえつつある。

しかし、生徒の中には浜っ子特有の気質を残す者も多く、最近まで随所に粗野な言動がみられ、授業放棄、暴力行為、教師に対する反抗的態度等、目にあまる問題行動が絶えなかった。昭和44～46年ころは、そのピークに達していたといえよう。

このようなことから、学校での指導の重点はもっぱら生活指導面におかれ、学習指導はやむなく二の次にされがちであった。したがって、生徒の基本的な生活態度の形成、行動習慣の訓練等が歴代の校長、教職員の最大の課題であったといっても過言ではあるまい。

たまたま、昭和46年度、「集団学習」の研究に着手した新潟市立教育研究所(現市総合教育センター)から研究協力校の要請があり、『学習する集団』形成の研究実践の第一歩をふみだすことになったのである。折りし

も、本校では努力目標として、新しく

① 学力向上をめざす学習態度の育成

② 学級経営を根幹とする生活指導

の2点を掲げ、生活指導の充実と学習-指導の改善の方向を暗中模索中であつたので、研究所の意図する『学習する集団』形成の考え方に共鳴するところがあり、研究所の研究の実践化をひきうけるに当たっては、比較的スムーズにことが運んだように思われる。

しかし、実際に研究を進めていくうえでの学校の組織運営体制には全く問題がなかったわけではない。観念的には研究の趣旨や内容を理解し、情意的には協力をいとわなくても教科担任制の中学校では、全校体制としての研究の、主体的な受けとめ方をどう組織していくかは、きわめて大きな問題である。

当校では、生徒の学習や授業に対する関心は全般に低調である。また、父兄の学校に対する期待は意識調査が示すように、「もっときびしい態度で教えてもらいたい。」という形で表わされる。このような特異な状況のもとでは、『学習する集団』形成に大きな困難性をともなうことを懸念するむきもあった。反面、だからこそ、この研究の強力な推進の必要性を認める声も聞かれた。とにかく現状ではだめだという一種の危機感は、一応全職

わってしまう。われわれがめざしているものは、かつてのグループメソッドとは異なり、学習-指導過程そのものを生徒の手にかえすことによって、生徒を名実ともに学習の主体者にするのである。したがって、その基礎になる「年間指導計画」、「単元展開計画」さらには1時間の授業過程を樹立するにあたって、そうした一貫したねらいのもとに再構成されなければならない。たとえば、

ア、協同調査学習・協同作業学習・集団討議学習の各方式をどう使いわけて指導の効果をあげるか。

イ、それを単元展開過程のなかにどう位置づけて目標の達成をめざすか。

ウ、1時間の指導過程の中に、個別・小集団・全体・一斉の各学習場面をどう配列して協同活動の推進を期待するか。

エ、「出し合う」・「もとめる」・「たしかめる」などの思考活動をどう組織して集団思考の深化をはかるか。

といった問題を素通りしては、『学習する集団』形成はからまわりに終わってしまうであろう。これを全教科、全領域に体系づけることが急務であり、また、実践上の問題となっている。(別紙・資料参照)

(3) 学習課題の設定はどうすればよいか。

自主協同の学習過程は、学習課題の設定のいかんが、その成否のカギをにぎるといっても過言ではない。生徒ひとりひとりが意欲的に取り組むことができ、しかも、みんなの知識や経験をもとにした集団討議が活発に行なわれ、相互批判ができるような課題が設定されたならば、集団思考や個人の認識が深まり、集団への所属感も高まるであろう。このような課題は教師の豊富な教材研究の上になち、学習内容の本質にせまるものが、思考深化の過程にそって設定されねばならない。しかも、われわれは、このような学習課題を、生徒自らの手で発見させようとしているのである。

その手だてをどうするかが大きな課題である。たとえば、

ア、全く教師が一方向的に考えたものを設定する。

イ、生徒に全面的に任かせる。

ウ、教師が、生徒とともに考える。

などが考えられるが、一応、われわれがとっているものは、ウの方法である。とはいっても、現実には時間的にゆとりがなく、教師の考えがそのまま採用されるといったケースが多い。

また、学習課題は、

・ 小単元ごとに設定していったほうがよいか。

・ その学習の前時に設定すべきか。

といった問題もでてくる。

(別紙・資料参照)

(4) 『学習する集団』形成の成果をどのように評価するか。

今まで、集団学習の推進過程で遭遇する数多くの問題点を列挙したが、これらの諸問題の最も根本をなすものが『学習する集団』形成の評価の問題である。したがって、『学習する集団』形成の究極の問題点は、評価の問題であるといっても過言ではなからう。

われわれは、「評価は、学習の結果だけでなく、意欲や態度形成をも含むものでなければならぬ。」という考え方のうえに立ち、評価の観点を次のようにとらえてみた。

機能面 \ 次元	集団レベル	個人レベル
課題達成面	「集団課題解決」	「認識」
集団維持面	「集団風土」	「意欲」

その他、評価の手だて、評価の実際、評価の困難性という面から問題提起してみたい。(紙面の都合上、別紙・資料参照)

4. むすび

以上、『学習する集団』形成実践上の諸問題をいくつかあげてみた。各位のご指導を賜わり今後の実践に生かしたいと思う。

---

生 活 指 導 (教科外生徒指導)

---

中 学 校



## 自己指導の態度形成をめざす生活指導

愛知県豊川市立中部中学校

### 1 はじめに

「すなおで人なつこく、与えられたことは着実にやるが、自ら問題を拵って積極的に取り組み、ねほり強く追求しようとする態度に欠けている。」というのが本校生徒の一般的な傾向である。このような実態をふまえて、私たちは、「ひとりひとりを大切にするとともに、集団の質をだかめ、相互作用を生かして、きびしい自己指導の態度を育てる。」ことを本年度の総括的な重点努力目標とした。

年度当初の研究協議で、このような目標に取り進むには、なによりもまず望ましい人間関係がつけられねばならない。望ましい行動環境としての学級づくりが基礎になくってはならない。」という共通の理解を深め、教科・道徳・特活の各領域を統合する立場からの学級づくりに重点をおいて、研究と実践を進めてきた。

### 2 学級づくり：学級づくりの基盤となる考え方

- (1) 望ましい個人は望ましい集団によってのみ教育されるし、望ましい集団は望ましい個人によってのみ形成される。
- (2) 集団の持つ教育的機能がじゅうぶん発揮されるような集団をつくらなければならない。
- (3) 教育は、生徒の自己統合・自己実現を援助する過程であり、自己指導・自己訓練・自己評価のできる人間を育成しなければならない。
- (4) 自己指導の態度形成をめざす教育の効果を上げるためには、彼らに習得される経験の種々相がくいちがったり、離反しあったりしないで、まとまった統一的全体を形造っていくようにしなければならない。

### 3 教科の指導と教科外の指導との統合をめざして

自己指導の態度形成が私たちの目標であるが、そのような態度形成は、集団を離れては考えられない。目標に近づくために重要なことは、様々な集団過程において、自ら目標を持ち、成員相互が強く結合し、緊密な相互作用を生み出していけるような学習集団に、学級なり集団なりを組織していくことである。そして、そのような学習集団づくりは、教科と教科外、授業場面と生活場面のいづれを問わず、それぞれの集団過程の指導が相互に関連を持ち、統合的に進められていかねば、効果をあげることはむずかしい。つまり、教科の指導と教科外の指導の統合は具体的には、学習集団づくりの実践を通して実現されていくものと考えている。

私たちは、学級や集団のひとりびとりが、目標と取りくみの手だてを持ち、やる気を持って、落ちこぼれることなく参加できるようにしてやらねばならない。そのためには、小集団の機能を高め、活発に運営することが学習集団づくりの基盤とならなければならないと考え、その実践に取り組んでいる。

#### (1) 教科の指導

認知目標と態度目標との同時達成をめざす学習指導においては、知識や技術の習

得と、その態度の形成とは一体のものであり、切り離して考えることはできない。そのような要求に応える学習指導のあり方を求めて、私たちは次の諸点を学習の場を実現しようと努力している。

- 効果的な課題を設定し、追求の過程を重視する。
- 課題への取り組み方を教科の特質に応じて、系統的に指導する。
- 学習への積極的な参加を促すために、学習過程の必要な場面にバズ学習を位置づけ、個人思考を重視すると共に生徒の相互作用を有効に生かしながら学習を進める。
- 学習過程に生徒自らによる態度評価を取り入れ、態度形成の促進をはかる。

## (2) 学級指導

生徒指導の中核的な位置を持ち、知・情・意の調和のとれた人間形成の基盤となるものが学級指導であるとし、他領域の指導と緊密な連けいを取りながら計画的な指導を進めている。とくに統合的な指導という面からは次の点を重視し、実践に力を注いでいる。

- 「1年から3年に至るまで」一貫して効果的な指導ができるよう、学年指導計画、1時間ごとの展開例（題材・ねらい・主な展開例）を作成し、指導内容の積み上げをはかる。
- 小集団の育成につとめると共に、必要な情報をメモする態度を養う。

## (3) 学級づくり

各学級は7つの生活グループに編成され、それぞれの班は、同時に学習班としての機能を発揮することができるよう小集団としての育成に力を入れている。質の高い集団を育てることによって、豊かな個の人格形成をねらっているわけであるが、この学級づくりの土台を固めるものとしてとくに力を注いでいることをとり上げて、紹介してみる。

- 個人面接の重視。

相談活動計画に基づく定期相談・自由相談・呼び出し相談などが行なわれているが、これらのうち定期相談の変形ともいえるべき担任と生徒との短時間面接がある。担任と生徒とがきりかて自然の意識のうちに、対話をし、執利と理解を深めて、個々の生徒の内部開発をめざする分から5分程度の面接である。2学期にはもうすこし時間を多く確保して、いっそう触れ合いを深めようと計画している。

- グループノートによる内面の刺し。

集団の中の個としての自分のあり方を自覚させ、相互理解を深め、連帯の意識を高めると同時に個々の物の見方、感じ方を高めていくには、グループノートが重要な役割りを果たしている。仲間どうしで「書きあつ」ことによる認識の広まりや深まりの効果も見逃せない。担任としても、感想や助言を書き加え、おにが「おうちの考え方、感じ方、行動」であるかを具体的に教えることができる。生活認識の質を高めたり、広めたりするためには、自由な題材で書かせるだけでなく、一定期間、特定の課題を与えて書かせることも試めている。

## (4) 「自主学習」の時間を通しての指導

週3日（月・火・木）、授業後30分を「自習学習の時間」として教育課程に組み入れ、自主的な生活態度と学習態度の統合的な指導の場としている。小集団によるバズ学習を中心にして、その日の授業内容の復習（ポイント抽出）や予習内容の

見直し、計画化などを行なわせ、学習の基本的な態度の形成を旨すと同時に、  
気がねなく話し合い、個々の問題を共同思考の上のせて、自分たちの力で解決  
しようとする「自主協調」の態度育成にも力を注いでいる。

○ 「計画ノート」や「自主活動運営ノート」による指導

学習においても、生活においても、目標-取り組み-確認-反省・評価とい  
う一連の活動原理は自己指導の態度形成には欠くことのできない要素である。  
これを、生徒の内面に形成定着させるには、具体的な問題に即して自らが、実  
際の体験を重ねるということを、着実に押し進めていくことが重要である。そ  
のための手だてとして、現在、1年生には「計画ノート」、2年生には「自主活  
動運営ノート」を使用させ、自主学習の時間を中心に、短学活などでも補充しな  
がら記入させ、生活や学習の計画化、自主的協調的態度形成の促進につとめて  
いる。

(5) クラブ活動の指導

教室の指導と教室の外での指導の統合という面から考えると、クラブ活動の運  
営の如何は教室における態度形成にも大きなかかわりを持っている。クラブ活動  
は、個性の伸長を旨すと同時に、自主・協調・創造の態度形成の重要な場でも  
あるという認識に立ち、つぎの諸点に力を注いで活動の充実につとめている。

- 自主的な活動を促進させるため、各部ごとに年間活動計画を立て、さらにク  
ラブ日誌に毎日の活動計画を記録させたりして、目標-計画-活動-反省など  
が実質的に行なえるように指導する。
- リーダーの育成と、部相互の活動状況の交換をかねてキャプテン会議を適宜  
開く。
- 活動の過程に必要に応じて、バズを取り入れ、部員の相互作用を促進すると  
共に自主的な運営の進展をはかる。

(6) 短学活における指導内容の充実

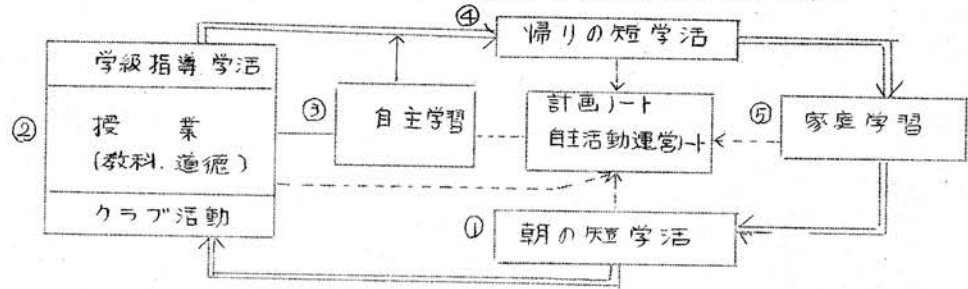
朝・夕2回、各10分ずつの短学活を実施しているが、ここは、学校生活と家庭  
生活とをつなぐ重要なパイプの役目を果たす場としても大きな意味を持っている  
ので、その活動内容は、常に実践と改善のスパイラルな積み重ねによって充実される  
よう努力が続けられている。さらに、ここでも、自主学習の時間の指導と連けい  
を取り、「計画ノート」「自主活動運営ノート」などを活用させ、バズを通して、「  
1日の目標」「家庭学習の点検とわからない点の解決」…(朝)「生活の反省」  
「学習問題についての対策」「学習を中心とする諸連絡」(夕)など、学習に関す  
ることがらも取り入れて、生活と学習の同時的な指導の場となるよう心がけてい  
る。

(7) 循環方式による統合的指導

教科の指導と教科外の指導の統合といっても、具体的な実践の場となると、実  
質的にその徹底を期することはなまやさしいものではない。それぞれの場におけ  
る指導が相互に一貫した連けいを持たないとかけ声だけに終わってしまう。本校  
では、「朝夕の短学活」「各教科の学習」「自主学習」「道徳」「特活」「家庭  
学習」と、これらの指導が生活と学習の統合という形で一貫し、スパイラルな経  
験の積み上げがなされるとき、態度形成はより促進されるという考えに立ち、次  
図のような循環方式に即した指導を進めている。この場合、前述した「計画ノート



や「自主活動運営シート」は、このような統合的な指導のための「くさび」の役目を果たすものとして位置づけ、活用の習慣化をねらっている。



循環方式による統合的指導についてもうすこし補説するとつぎのようになる。上図、①から②③④⑤、さらに①へと回帰する一貫的な指導を積み上げ、その循環的な過程を通して、とくに「取り組み方」の態度形成を促し、教育効果をより高めようとするものである。この場合、統合のこぼれとなるものは… 自主性・協調性・創造性であり、指導内容として一貫するものとして、

- 目標を明確に持つこと。
- 取り組み方の訓練と体得を心がけること。
  - ・ 課題への取り組み方
  - ・ ひとりで考える→わからなければ「友達」に聞く→聞かれたら教える。(バズ学習の位置づけ)
- 反省自己評価する。
  - ・ 日々の生活態度・学習態度を反省・評価(態度の自己評価)し、かんたんにメモする。

などの三要素を定め、生徒への定着を旨として実践を重ねている。

#### 4 今後の課題

- 小集団の機能をよりたかめるための手だて、とくに話しあいの能率化をどのようにして実現するか。
- 統合的指導の中核となる具体的な指導原理の創造と確認。
- 家庭と学校との教育を統合的に進めるために、両者に一貫する取り組み方(学び方)の基本的な内容を精選し、計画的・系統的に指導すること。

## 第7回全国バズ学習研究集会

### 望ましい人間関係を育てるバズ学習の実践について

— 地域ぐるみのとりのくみの中でひとりひとりの学力を伸ばす —

兵庫県飾磨郡夢前町立鹿谷中学校

小林 昌 義

#### 1. はじめに

一学期も終わりに近づいてくると、本校の廊下は色とりどりの文字でかかれた短冊がにぎやかにはり出される。生徒会生活部がはり出した月目標である。「ガラスをこわさないように。」「他人に迷惑をかけない。」「服装は中学生らしく。」「公共物は大切に。」……

この貼紙の下で廊下の腰板のいたみが目立ち始める。これは学校がおもしろくない一部生徒のいたずらである。これには必ず原因がある。この究明なくしては指導も空振りに終わる。これらの裏に現在教育のあり方や指導の再点検が、生徒の声なき声としての叫びがききとれるような気がする。

○生活指導をバズ学習にもとめて

教育を受ける権利を保障するために、平等を基本とした機会均等の理念に支えられた教育で自らの力で未来を切り開いていく人間をどう育てるかということが中心になる。そのため、生徒の願いに応えるため、子どもたちの教育権を徹底的に守り、未来を保障する教育を権利としてとらえ、人間尊重の民主的生活態度を確立させる教育を押し進めなければならない。

自分の願いを言葉に托して、相手に認めてもらい、お互いを理解し尊重しあって、手をとって望ましい方向へ前進する雰囲気づくりにバズ学習をとり入れた。そうしてこの中で望ましい人間関係を基盤に個性に応じて、ひとりひとりの学力を伸ばそうとしたのである。

#### 2. 現在までの歩み

○昭和47年度

生活指導を中心としたバズ学習の研究。

部落差別、同和問題を核として望ましい人間関係づくりに重点をおいた。

学級の集団づくり、生徒の社会的態度や行動、非行防止を重点に又、基礎訓練に努力した。

○昭和48年度

学級づくりを中心に自主性と協調性を柱にして生活指導面と学力の向上を学校教育全領域の中で一貫性のある指導にとりくむ。

○昭和49年度

昨年度の反省にたって生徒の願いを受けとめて、ひとりひとりを最大限に伸ばしていく教育の具体的な実践研究。

望ましい人間関係づくりを中心に他人をみとめ、はげましあい、きびしさの中で自他を改造していく集団の組織づくり。

おちこぼれる子をつくらない教科指導。

以上を本年は目標にとりくんでいる。そうしてこれの達成のため特に下記を努力点としている。

○学習に落伍者をつくらない指導の効果的な具体策

○バズ学習の再点検

○評価法の改革と追跡指導

○基礎学力テスト等から個人のつまづきを発見する。

○生徒の願いにこたえる指導を父母と共に。

そうして望ましい人間関係と学力の向上をねらって、考えられたバズ学習方式を中心に、社会的心理的理論の研究とをあわせて。

○教師と生徒の肌のふれあい。

○学校全体の管理、経営のあり方。

- 成長した学級の社会的雰囲気づくり。
- 教師集団の成長と指導の一貫性。

に力を入れて実践にとりくんだ。

### 3. 実践経過

#### (1)父母とのとりくみの中で

我が子の健やかな成長と将来への期待に親として、願いをもちない父母がいるだろうか。

しかし、現実を考えると生活指導で生徒相互の親和や協力を強調しながら、ともすればテストや賞罰などにより、不当なまでに個人的競争を刺激し、現行の評価法や入試制度の中で、反目、対立、嫉妬、劣等感などいまわしい人間関係をかもしたり、家庭ではあの子にまけるなど、たえず叱咤激励し、結果は一方では指導し他方でこわしている形となっている。こうした競争の原理に立脚したような教育を押し進めている限り真の成果は上らない。

- 父母にバズ学習方式の理解を

父母会のプリントより

「学校教育は教師と生徒という単純なものではなく複雑な人間関係、集団関係が存在し教育の成果に重要な影響を及ぼしています。ここに目をつけ個人の考えを集団に広げ、協同の精神をやしなひ、できない子をほっておけない仲間づくりを中心に態度と学力の向上を一致させ、りっばな人間関係を作っていくため、班活動を中心にしたのがバズ学習方式のねらいです。この人間的なつながりこそ差別や偏見をも、りっばに処理できる同和の精神に立った真の教育であると考えられます。」

バズ学習とは

4～6人の小さい班の仲間が話しあうことによって教えあい、助けあい、相手の立場をみとめ、望ましい人間的なつながりをきづなにひとりひとりがしっかり伸びていく学習方法です。

バズ学習の利点は

- 親しい仲どうしの小人数で学習に気軽に参加できるから、やる気おきます。
- 話しあうことにより理解を一層深めます。
- 向かいあって発表できるから仲間にならえ、意欲的参加を容易にします。
- グループのひとりひとりのよい考えや態度がよくわかり自分もよい方向に変わってきます。

- 協力的自主的集団として成長し非行がなくなります。

そのためには

人に頼らない、話しあいを大切に、何事も積極的に、区切りをはっきりと、むだ話しはしない。自分勝手な行動はだめである。予習復習はしっかりと、……きびしい訓練が必要でこれに力を入れていますから御協力下さい。

父母の組織

#### ◎PTA組織としての活動

- 教養部

毎月の授業参観、研修会、生徒教師父母の三者懇談会等の計画

- 愛護部

交通指導、環境整備、校外補導対策、親子共同作業計画

- 保健体育部

給食研究、体育祭協力、衛生諸活動等の計画と実施

- 同和推進部

各部落懇談会の同和推進計画、映画講演会の実施等

#### ◎父母学級としての活動

- 毎月一回授業参観後、生徒の生活問題や同和問題を中心に学習し意見交換を行う。

- 生徒と合同で生徒や親の願いについて意見交換会をもつ。

父母会プリントより

りっばな鹿谷中学校となるよう共に励ましあい協力して頂くため、ひとりでも多く参加して頂き親の願い子の願いを大切に地域ぐるみの運動へ展開していきたいのです。

父母学級委員の役割

- ①出席を多くして頂くための誘い合せ。
- ②父母の声をききテーマに。
- ③話しあいの進め役。みんなが意見を出すための仲もち、雰囲気づくり。
- ④学校と家庭と一緒に指導したい話題

例……◦家庭のしつけ

- 家庭での学習のさせ方
- 男女交際
- 休日のすごさせ方
- 非行、服装、態度、校則について

⑤一人では学校へ言いにくい要望をきく。生徒の生活指導に同和学習に討論をバズ学習方式により意見交換を行った。そうして父母のひとりひとりの問題としてとりくんだ。リーダーとしては各部の役員や学級委員の父母があてられ、なごやかな自然の雰囲気の中で自分の子、他人の子の区別をなくし、親の優越感、劣等感等の考えもなく、学校の教育を理解してもらい手を取りあって熱心に活動してもらった。特に校外指導に協力してもらった。自主的に会合や懇談会は昨年度1ヶ年に各部門別を合計すると75回もたれた。そうして生活指導は地域ぐるみの運動となってきた。

○親子合同学級会での生徒の声

- ①。いつも子どものことを考えて心配している
- 子どもの幸福を願う気持ちで一杯だ。
  - そのときは一方的だと思うが大人になってみるともっともだと思うだろう。
  - 不合理な面もあるが、長い経験にもとづくものだから尊敬すべきだ。
- ②。押しつけがましい。
- 一方的で自分の言うことは何んでも正しいと思っている。
  - 自分勝手に子どもの気持ちを理解しようとしなない。
  - 考え方が固くて新しいものにぶつかる気力がない。
  - 世間体ばかり気にする。
  - 打ちつけて本当に自分たちの相談相手になってほしい。
  - もっと素朴に子どもを信じてほしい。
  - 公平であってほしい。

生徒が親や近所の大人の意見を理解しようと努力していることはわかるが、まだまだ断絶がある。我々も生徒の本音を理解した指導でありたい。この中で自主性を尊重し、生徒会で計画した校内球技大会、運動会、学芸会などがりっぱにできた。特に卒業式では下級生がひとりひとりに手紙をわたし、花をつけて心から門出を祝福できる人間関係をかもしだした。この雰囲気の中で非行の

できる筈がない。

人間的つながりを大切にし、一番言いにくい立場の父母から何んでも言える学級会がつくられたときに、地域ぐるみの指導ができるのだと思った。

(2)落伍者をつくらない指導

短学活や復習バズでは学習に対する意欲づくりを第一の目標にしているが、

- バズ学習は生徒相互の作用を生かした活動形態であるから自主性が身につく。
- 生徒が質的に望ましい方向へ変わってくる。
- 人間関係を高めながら学力が互いに向上する。

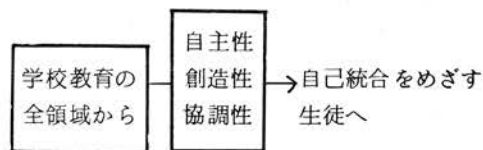
以上のことを期待して、実践している。その過程において相手をもとめ、尊重し、人間関係が向上する。しかしこれを支えるものは誰もが思ったことを何んでも言える学級の雰囲気づくりであり、又わかる授業をどう創造していくかである。「わかりたい。みんなと一緒に考えたい。みんなに話しを聞いてほしい。」と言う願いにこたえてやりたい。そのため

◎班でどうしても学力不足のために、ついていけない子の指導。

◎家庭的社会的経済的又は身体障害のために伸びる可能性をもちながら、伸ばされずにいる子に対して、その障害を除き個人の能力個性に応じた指導し学力を向上させる必要がある。

これらの生徒は何か所属感というものが安定しておらず、なぜ学習しなければならないか、その意欲を支える人生観のようなものや将来の自分なりの進路に対しての見通しが十分につかまれていない場合が多い。

指導の考え方



そのためには、わかる授業をしていくことが第一である。

——人間関係の向上をねらって

(バズ学習方法)で(願いにこたえ)

部落差別問題を焦点化していく中で

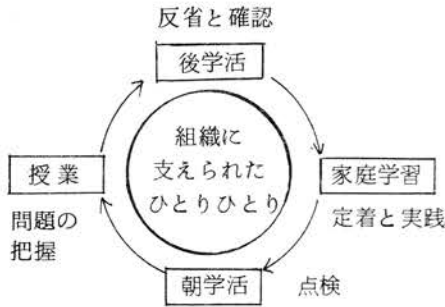
相手を認め↓尊重し

全人教育を完成させる。

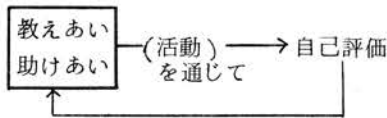
○ 具体的指導

① 学級の雰囲気づくりが急務である。

「できない子に対する援助や教師の個別指導は当然である。みんな揃って前進してこそ意義がある。」



集団思考を大切にしながら



フィードバック

(やる気づくり)ができる。

② 問題ができない。説明がわからない等は必ず原因がある。生徒の実態把握の上に立って現実をみつめて、対策を立てる必要がある。

例 3年 125名中 30名 (2段階 24%)

問題	正答数	誤答例
$0.05 \times 0.3$	13	0.15 1.5
$2.4 \times 0.08$	11	0.03 0.3
$\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$	23	$\frac{2}{5}$ $\frac{1}{6}$ $\frac{1}{5}$
$4x-9=3x-5$	9	$x=-4, 14$

③ 評価法の工夫と生徒による自己評価の機会をできるだけ多くあたえる。

- 各自で偏差値のプロフィールを作る。
- 反省文、学習態度の反省

④ 教科別個別指導の実施

教科担任の教師とその補助担任の二人制をとりグループ学習に参加できにくい生徒への援助を目的として側面から指導を行なっている。  
特に数学を中心に行っている。

各学年時間数

	国	社	数	理	英
1年	4	0	6	2	2
2年	0	0	7	3	0
3年	2	3	4	2	0

「わかった。できた。」のよろこびを味わわせたい。よろこびは大きな自信となり参加度を促す。成果はまだはっきりしないが生徒の願いにこたえたい。

(3) 今後への反省

小集団学習によって向上した成果を把握することはむづかしいが、いくつかの観点をおさえて、検討しなければならない。それぞれの目標達成のための活動過程において望ましい人間関係が養われるのであって、解決された結果だけで評価すべきでないと思う。

- ① ひとりひとりが集団活動の目標を自分のものとして全員の自主的参加を求めているがともすれば形式的活動となり魅力を失いやすい。
- ② 活動の結果のみに注意が向けられ過程が軽視されがちになる。
- ③ よりりっぱな活動と思って高度化していくと一部生徒のための活動偏在化が見られる。
- ④ そのため教師自身も工夫にかけ画一的指導に流れやすい。高度な要望をどう低く具体化するかの努力が必要である。
- ⑤ 集団の生活指導は一朝一夕にでき上るものではない。毎日の小さい積み上げこそ大切で、全職員の共通理解を深め一貫した指導体制、生徒父母教師三者の協力体勢と現実をふまえた、地についた生徒の願いに応える指導でありたい。そのため父母生徒の要求願いの白書づくりに委員を作って進めている。

そうして、これらの活動の中でなんでも言える学級をつくり、ひとりひとりの学力を伸ばしつつ生徒会の自主的活動を助長し、おちこぼれそうな仲間を支えあっていき、学力の保障を地域ぐるみの運動へ発展させていきたい。

第7回全国バス学習研究集会

生徒指導の実践

—— 行事への取り組み ——

新潟市立曾野木中学校

松本 欣一

1 はじめに

全人教育，全校集団づくりをめざす教育

2 生徒会活動の実践

(1) 自主性・自治性の教育の場として

(2) 職員の統一意識と生徒会活動

(3) 行事の組織化

ア・文化祭

イ・三学期の取り組み

(4) 行事の取り組みと学級

(5) 生活のリズムときまり

### 3 残された問題点

(1) なれ合いの防止

(2) 日常化の推進

(3) きまりへの取りくみ

(4) 指導とは何か

---

校外・地域 (PTA・補導・部落バス等)

---

小・中学校



## 創造力を高めるバズ学習

広島県豊田郡豊浜町立豊浜中学校

山 根 正 純

### (1) 取り組んだ動機

本校生徒の特徴である言葉使いが悪い、挨拶をしない、家庭学習がなされない、規律性に欠ける、独善的である、依頼心が強い割には非協力的である等の問題は単に学校教育のみでは改善されるものではない。

本地域の産業は農業と漁業が半々、漁業家庭では両親が出漁で不在という家庭が多く、農業家庭も近年のミカン産業の不振で出稼ぎ家庭が年々増加していく傾向にある。

島特有の封建的色彩が根強く残り、この閉鎖性を打破するには、家庭教育、社会教育、学校教育の三つが統合されて、はじめて達成されるとの前提のもとに、学校教育の限界を打ち破るべく始められた。

### (2) 目 標

生徒

①自主性・主体性を養成することにより教科の力をつける。

(先生に注意されるから、委員に注意されるから、しかたなしにというのでなく、進んで問題に取り組み、意義のある時間とする)

②家庭学習の方法を練習し、継続して家庭学習ができるようになる。

(まず自分で問題を考え、不明の点について、ひとの説明を聞くことにより、解答のしかたがわかり、学習方法の指針を得、毎日かかさず家庭学習ができるようになる。)

父 母

①教育への関心を高め、学校教育への意識を高める。

(すべて学校まかせという考えを捨て、教育は私達にも責任があるのだという自覚を持ち、教育すべてのことを考える。)

②誰が注意しても聞けるように、生徒との人間関係をつくる。

(町内バスを通して、自分の子どもを他家の子どもと比較する中で客観的に観察し自分の子どもだけ良ければよいという考えを捨て、他家の子どもへも抵抗なしに注意できるようになる。)

教 師

①教科バスの応用練習の場とする。

(教科でのバスの活用は教師の主体であるが、町内バスでのバスの活用は生徒自身の主体であり、外側からバスを観察できる。)

②生徒の家庭学習について父母、教師が一体となって考える。

(会場で父母と教育について語り、その中から意義ある家庭教育について一緒に考える)

(3) 実施方法

一昨年までは土曜日の午後実施していた

が 欠席者が多い、教師の負担が大きいとの理由で、昨年度から毎週水曜日のH・Rの終了後(2:40)校庭に各会場ごとに整列し、バス長の指導でそのまま会場に行き、三時から 三教科、一時間半実施している。

(4) 問題作成

時間割にそって教科担任で問題を作成し会場ごと生徒数だけ問題用紙を箱に入れておく。当日教科委員が会場に持って行く、

家庭学習の習慣化という点を重視し、下のような形式で問題を作成し、右半分を木曜日に教科委員に提出する。教科委員は点検して返却する。

○年○科 ○月○日	家庭学習 組 氏名
1. 基本的問題 (誰でも取り組めるよう資料を明確に示す)	1.
2. 1の応用問題	2.
3. 発展問題 (解答作成)	3.  木曜日に教科委員に提出

(5) 問題点

①前日学習する教科を放送で伝達するが、

教科書、ノートを持ってこない生徒がいる。

- ②学習に真剣に取り組めず、解答を出す過程より、答のみを追求し、他の生徒のを簡単に写そうとする。
- ③雑談が多い。
- ④時間配分が機械的であり、バズが盛り上がっても、次の教科にうつる。
- ⑤バズの声量が大きい。
- ⑥反省会が形式的であり、進歩がみられない。
- ⑦リーダーの養成に欠け、全体のまとまりに欠ける。
- ⑧木曜日の問題の提出が完全でない。
- ⑨出漁で不在を理由に、一部落（四会場）で父母に出席してもらえない。
- ⑩休み中は欠席する生徒が多い。

(6) 父母の意見

- ①出席しても何もすることがないようで手持ぶさたである。
- ②参観日は行けない事が多いが、先生と話す機会ができる。
- ③夏の暑い時は、冷たいお茶ぐらい出してやろう。
- ④子どもと一緒にレクリエーションをやってみよう。

(7) 父母の参観ノートより

今日の学習ですが態度も変って来たように思います。各自のすぐれた素質をあらわはじめたものと、たくましく感じています。きっとよい成績を上げてくれるものと期待しています。

夏休みで気分がだれがちですが、涼しいのですから時間内はしっかり身についた勉強をして欲しいと思います。十時に終わったら、一時間ぐらい雑談とか室内ゲームとか、レクリエーション的な事をして、お互いの心のふれ合いの場を作っても良いのではないかと思います。

(8) おわりに

町内バズは軌道に乗っているように見えその実、父母に対して教育への関心を高め我が子を集団の一員として眺める機会を与えたこと、婦人会と一緒に地域の道路そうじ等をやるようになった事は、一応の成果と思われるが、生徒の主体性の高揚はあまり感じられなく、町内バズに対して受身的である。

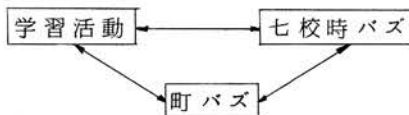
町内バズの意義、目的が生徒、父母に十分理解されておらず、理論をくり返して説明しているだけではいけない事を痛感し、「町内バズ二学習」に我々教師自身もこだわりすぎており、学習をはなれて思い切った改革をする必要性があるのではないかと考えている。

# 地域社会と結ぶ全体的バス教育体制

兵庫県姫路市立高丘中学校

## 1 はじめに

本校では生徒の自主性、相互作用を養うために



の基底講造の上に立って日々のバス教育体制を確立し、教育実践に努めている。その精神は一人一役（班長、学習、生活、健康）と相互作用による自他の高まりにあります。

具体的には小集団学習による教科、道徳同和学習だけでなく、七校時る設け、教科の復習バス、生活バスを行い相補的な関係を作り、さらに七校時バスの過程の類型を地域にもっていき町毎の学年の枠をはずしたオープンなバスも行っている。その進展として各町に地域生徒と保護者の自主的活動のための中学部会も発足し始めている。かくして学校教育、社会教育、家庭教育を支える支点としての町バスの位置づけが確立されてきたと思う。

## 2 町バス実施の現況

(イ) 町バスのねらい

- ① 学校、家庭、地域を結ぶパイプ役にする。
- ② 父兄の目を、わが子だけでなく、地域全般の生徒の上に注がせる。
- ③ 集団の相互作用によって、人間関係を

高め、個人の発達と集団の成長をねらう。

- ④ P T A 活動の正常化、活発化をはかる。
- ⑤ 地域社会との連携を進める。
- ⑥ 「町別生徒部会の結成と活動」の基盤にする。（子ども会に対する中学部会）

(ロ) 実施方法

- ① 日時 金曜日 午後 3 : 20 ~ 4 : 20  
（会場により時差あり。弾力的運営を行なう。）  
（冬時間 午後 3 : 35 ~ 4 : 35）

② 内容

- a 学習バス 3 : 20 ~ 4 : 05  
( 45分)
- 反省バス 4 : 05 ~ 4 : 20  
( 15分)

- 学習バスは、課題方式とし、各学年毎に町バス委員が教科の担当を決め、輪番で課題プリントを作成する。（町バス係の先生が指導する。）
- プリントは 3 教科（ 9 教科を 3 回に配分）を集めて 1 枚以内に収め、配付する。  
プリント作成→町班長（または各クラス）→生徒  
（町バス委員）
- 反省バスでは、学習の反省の他、校外地域生活の反省、よい行為等の発表もさせる。
- b レクリエーション（公民館又は学校の運動場・コートを使用）
- c 町別生徒部会の結成又は活動に必要な

な話し合いの場にする。

(注)・b cの場合には、学習プリントは家庭学習にする。

・長期休業中は話し合いにより自主的に運営する。

(ハ) 参加方法

- 生徒 六校時が終了し、清掃後公民館に直行し、町バス終了後帰宅する。
- 父兄 輪番による責任当番制で、生徒の出欠確認、町バス日誌記入、理由不明での欠席生徒を出席させるように連絡、公民館整備への協力。
- 職員
  - ① 可能な範囲で町バスを補助し、指導する。但し、教科指導を行わない。
  - ② 課題プリントの事前指導、生徒の係からの相談に助言する。
  - ③ 課題プリントの事後指導、各教科担任で課題プリントの解答と質問の時間を授業時に組入れる。
  - ④ 理由不明で連続2回以上欠席生徒は、学級担任に連絡し、担任よりその生徒の指導をする。
  - ⑤ 出席父兄との対話を可能な範囲で行ない、学校と地域、家庭とのパイプにする。

(ニ) 実施時期(下記以外)

短縮中、長期休業中、定期考査中、学校行事又は学年行事のために1つの学年以上が参加できない場合は中止。

### 3 町バス日誌の形式

以下に示す雛型は町毎、学年毎に冊子として配付しているものであるが、町によってはこれとは別に保護者用の日誌を作っているところもある。

( 年 )

昭和	年月日	曜	自時分	天	担
			至時分	候	任印
父母出席者			参観者		
欠席生徒					
教科	学 習 内 容			問 題 点 と 処 置	
生活バス					
感	生徒				記
想	父母				録
					者

### 4 町別中学生徒部会結成の動き

本校では、地域社会、家庭教育との結びつきを重視しているので、町バスも単に今までの町バス形態にとどまらず、各町単位による地域ぐるみの自主的活動への推進を図っている。まだ過渡期的段階であり、町によって格差があるが既に着々と組織化が進み、円滑な運営を行っている町も出てきた。(その経過については、第3回バス学習研究集会発表要項参照)

こうした改革、発展には、転位の苦しさなどもあるが、未来の展望として、全部の町が地域中学生部会結成への歩みを続けている。

幸い本中学校区の各育友会、小・中学校関係職員、子ども会、補導委員などを含めた青少年愛護育成協議会が組織結成され、活動を始めているが、この町別中学生徒部会もその一翼を担い、文字通り地域ぐるみの協力態勢ができてきた。すべてにその活動は姫路城や書写山の清掃

などの奉仕作業、テレビ局見学、公共施設訪問などの社会見学、キャンプ、プール水泳、栗拾いなどの野外活動、バトントワールの練習などの多岐にわたり、地域生徒の健全な育成が期待されている。

## 5 同和教育における町バズの役割

本校に於けるバズ学習推進の発想はその初期において同和教育と無関係ではなかった。バズ学習の進展が即同和教育の進展であった。この意味からも今後、町バズをどう進めていくか大きな深題である。

同和教育の一環として行われている解放学級の開講への運び、組織運営等、町バズの果たした役割は大きい。同和教育を進めていく上で、町バズの積み重ねが、学力充実講座や生徒たちの地区同和学習へ及ぼしたものは、かなり大きなものがあったと思う。保護者の協力はもちろんのこと、生徒たちの出席率もよく、のびのびと自由な、それでいて真剣な発言や学習態度が見られる。

今後も町バズは解放学級への土台づくりとしてますます望ましい方向を探求すべきであろう。

## 6 問題点と今後の展望

町バズを始めて以来十年近くなり、方法的にも定着化が見られるが、それだけにバズ実践上のルールの上にあぐらをかいてはいないだろう

か。町バズ変遷の歴史もさることながら、現実を眺めると問題点や困難点も多い。

以下その苦しみや課題を列挙して提案とした。

- ① 10年前の町バズ発足当時と比べ、学校内外の事情が大きく違ってきているが、現実に即する方法がなかなか見つからない。
- ② 学校規模が次第にマンモス化し、時代の風潮と共に新たな問題が生じてきた。
- ③ 年度毎の職員、生徒、保護者の入れ替わりが大きく、年々共通理解や町バズに対する認識がうすれていく。
- ④ 学校行事や複雑になる校務も町バズ学習のねらい、ねらいに対する価値感の相異の処理と町バズとの兼合いの調整がむづかしい。
- ⑤ 公民館などの町バズ会場の物的条件の格差、収容人員の問題。
- ⑥ 各町の町バズ態勢の格差の問題。
- ⑦ 学校→町バズ会場間の距離と時間の問題。
- ⑧ 町バズ日（金曜日）と部活動の問題。
- ⑨ 形式化とマンネリ化の問題。  
やゝもすると形式的に流れ、時間の無駄とする向きもある。
- ⑩ 高校入試制度、改善への要求とのかかわりの問題。  
入試問題など現実と理想のからみ合いをどう解決するか。
- ⑪ 生徒の自主性と教師の指導性の問題。

提案者 浜 田 宏  
伊 勢 田 耕 一



第7回全国バス学習研究集会

部落バス学習の実践

—— 曾川部落バスと父母の立場 ——

新潟市立曾野木中学校

野上 弥作

1 はじめに

地域ぐるみの教育としての部落バス学習

2 曾川部落バスの実践

(1) 部落の実態

(2) 曾川部落バスの実施経過

ア・学校の姿勢

イ・父母の会

ウ・発令式

エ・生徒の姿

オ・父母の協力

- (3) 父母の役割
  - ア. 父母のうけとめ方

イ. 経費

ウ. 部落バズの指導と管理

- (4) 部落バズの展望
  - ア. 子どもの変容, 父母の変容

イ. 地域づくり

### 3 今後の課題

- (1) 時間帯の問題  
各年の負担、  
又、曜日による
- (2) 実施曜日統一の問題
- (3) 教師の指導と問題
- (4) 父母の指導能力の問題
- (5) マンネリ化の問題
- (6) 地域の協力態勢
- (7) その他

---

小 学 校 の 部

---

## 第7回全国バズ学習研究集会

### 読解学習におけるひとりひとりの

### 思考能力をどのように深めるか

姫路市立安室小学校 国光里美

#### 1. はじめに

刻々と科学が進歩し、情報があふれ、ますます複雑化していく現代社会において、今、子どもたちにどのような学力をつければよいか。

それは、問題に直面したとき、自らの力で対処し、創造的に解決・処理していくことができる能力や態度であり、知識の量ではない。この「創造的に」ということは「思考する」ことである。

このことから考えると、学習によって子どもたちに培うものは「思考する能力」であるといえる。子どもたちひとりひとりが「思考する方法」を知り、その子なりに全力をつくして考えていく道を開いてやるのが創造性開発への道であり、未来に生きて働く学力をつけることであると考えます。

この「思考する能力」を国語科ではどのようにとらえればよいか。

指導要領の目標に「国語で思考し創造する能力」とあるが、このことから、国語学習は「ことば」を媒介として「考える」ことの学習であるといえる。児童自身が、ことばで思考する方法を知り、自らの思考を構造化していくことができる能力が国語科で育成する思考能力である。

このように国語学習がことばを媒介として「考える」思考のプロセスをたいせつにする学習であるならば、学習内容を理解させればよいという解説的、注文的な学習方法であってはならない。個々の児童が知識として覚えなければならない基礎的な学習を土台にして、能力の高い児童も低い児童も、その児童なりに全力をつくして思考していく児童主体の学習が組織されなければならない。

本校では、ひとりひとりの思考をたいせつにして、読む領域、すなわち文章の読解学習の過程をとりあげ、どのように思考を広め、深めるか、また、個々の思考を磨き、深めるためには何をどのように話し合わせるかが望ましいのかに焦点をしばって実践してきた。

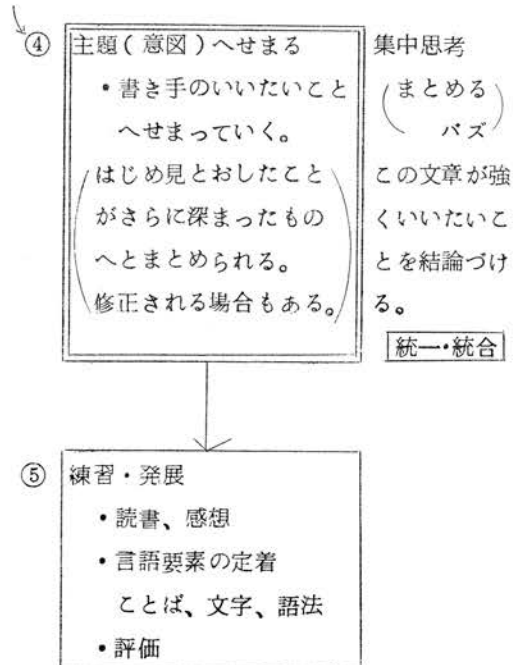
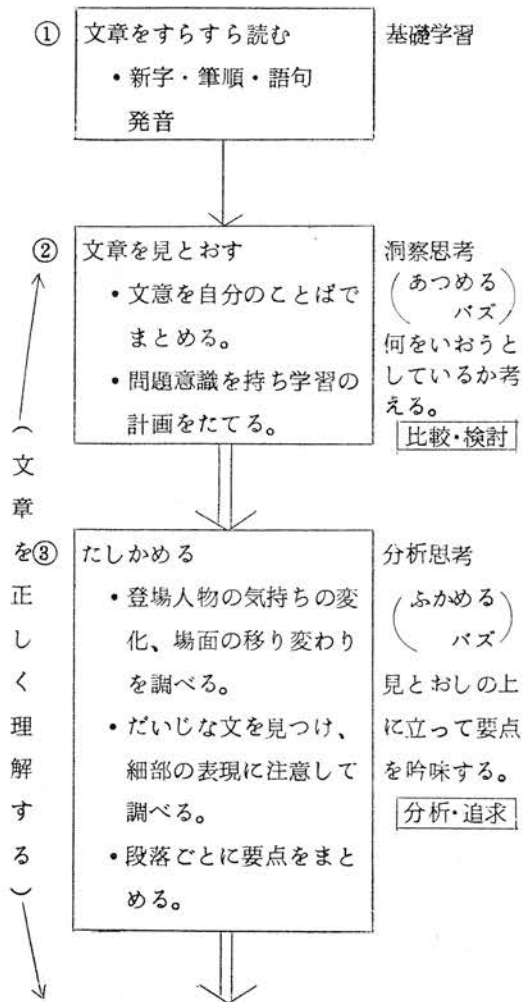
#### 2. 読解学習の基本的な構え

「文章を読む」ということは書き手の心にふれることであり、主題なり、意図なりをできるだけ正確に理解することである。なぜなら、文章は書き手が読み手を予想し、読み手に理解してもらうために、自分の思想や体験、思索などを、ことばを媒介として表現したものである。このような観点から読解指導とは書き手が見たり、感じ

たり、考えたりしていることを自己流でなく、書き手と共に自分の脳裡に感じとっていく能力を育てることであると考える。

そのためには、基本的な読解の操作を児童自身がふまえて学習を進めなければならない。文章全体に一貫して流れている作者の意図を直観的に見とおし、その見とおしをもとにして検証し、主題にせまっていく一連の過程をいうのである。この思考過程をふまえて、児童が主体的に読み深めていく中で、文章を読みとる力や思考力がつき、処理能力が培われていく。

◎ 基本的な読解学習過程



以上のような読解過程の中で、読むこと、聞くこと、理解活動、書くこと、話すことの表現活動が、お互いに作用しあいながら展開され、子どもたちは思考能力を深めていくことができる。

この児童主体の学習展開の中で、教師は個々の児童の、思考の傾向を充分把握し、分析して、観点別にチェックし、問題点を明確にして、個々の読解の方向づけをしていかなければならない。

たとえば、児童の読みとりが低い場合は、思考を深めるに足る適切な課題を教材に応じて提示し、より質の高い磨き合いに導いたり、児童の意見がもつれてきた場合には、そのもつれを整理したりする。また、問題の焦点がわきへそれたときは、それを正道へもどして話し合わせるなどの手だてを加えることが必要である。その場合、教師は学年の発達段階に応じて、目標を明確におさえておかなければならない。

◎ 読解能力の学年目標（基本的なもの）

学年	目標の内容
1年	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 何のどんなお話か考えて読む。</li> <li>• 何のどんなお話か、どんな気持ちかわかる。</li> <li>• あらすじがわかる。</li> </ul>
2年	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 文章に即して書いてあるとおりに、順序をたどって意味を考える。</li> <li>• 文章の見とおしができる。</li> </ul>
3年	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 要点をおさえて読む。</li> <li>• 文の見とおしができ、たしかめができる。</li> </ul>
4年	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 文章を段落ごとにまとめて読み、段落の関係がわかる。</li> <li>• 見とおしから主題への調べ方がわかる。</li> </ul>
5年	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 書き手の意図や主題がとらえられる。</li> <li>• ひとり読みとりができる。</li> </ul>
6年	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 内容と目的に応じて、それに適した読み方ができる。</li> <li>• いろいろな機能の文章がひとりで読みとれる。</li> </ul>

3. ひとりひとりの思考力を深める

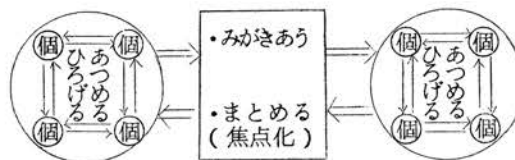
バズの位置づけ

文章を読解するのは個人である。思考を深めるということも個人の内面活動である。したがって、読解学習においては、“この文章を、自分はこう読んだ”という主体的な個々の読みとりが確立し

ていなければならない。しかし、個々の読みとりは、低い読みとりであったり、主題とのずれがあったりする。そこで、ひとりひとりの思考（読みとり）をより確かなものとするためバズ学習を位置づけ、学習の効率化をはかる。

学級全体の場合では、発言の機会も少なく、一部の児童に偏りがちになるが、グループバズにおいては、4～6人の小集団で話し合うため、全員に発言する機会が与えられ、ひとりひとりが活動しやすくなる。しかし、グループの話し合いだけでは、学習目標が十分に達成されにくいので、グループで広げ、あつめたものを、深め、まとめていく、学級全体の話し合い活動（全体バズ）を加味しなければならない。このようなグループバズ、全体バズを通して個人の思考が修正され、より確かなものになっていく。

（小集団） <学級集団> （小集団）



（個人への定着）

読解過程における具体的なバズの位置づけは、「基本的な読解学習過程表」に示しているとおりで、**「あつめるバズ」**は、自分の考えを、友だちの考えと比較、検討することをねらいとし、**「ふかめるバズ」**は、見とおしをもとにして、文章をくわしく分析し、追求して、要点を明らかにしていくことをねらいとしている。また、**「まとめるバズ」**は、読みとった要点を、文章に即して、深め、まとめることをねらいとする。

このような位置づけを原型として、学年、教材、児童の意識の流れなどを考慮し、いつ、どこで、

何を、どれくらい話し合わせるかを検討し、学習の組み立てをしている。

#### 4. 実践例

— 話し合いによる

個々の思考の深まり方 —

4年 「飛びこめ」 (光村)

◎目標 ・子どもをなんとしても助けたい父親の、深い愛情を読みとらせる。

〈主題からはずれた洞察(見とおし)をしているA児の深まり方〉

◎何が良かったのでしょうか。(各自見とおし)をたてる

思考1 (A児の見とおし)

少年が飛びこんで、40秒後に水の上へ上がってきたこと。少年がマストから落ちるひょうしに、水夫たちが飛びこんで、つとめをはたしたことがいい。

※ 主題からはずれた見とおしをしている。

◎どんな見とおしをしたか話し合しましょう。

(あつめるバズによって、見とおしを)比較・検討する。……グループバズ

〈実践例1〉

- A 水夫は、少年を助けたかったんだと思う。それは、水夫は船長にいわれなくても飛びこんだからや。
- B 私も、水夫が少年を助けたいということが言いたいのだと思う。船長に言われなくても飛びこんだのは、早く助けたかったからだと思

う。

- C 私は初め、さるがふぎけ回っていることがいたかったのだと思っていたけど、水夫たちが、少年を助けたかったという考えに変わった。
- D ぼくの考えは少しちがうんや。ぼくは、船長が「飛びこめ」と言ったことがいたかったのだと思う。あのとき、船長が言わなかったら少年は助かっていなかったと思うからや。
- B てっぼうでうとうとしたところも気持ちが表われているわ。
- C 水夫と船長やったら、船長の方が気持ちが強いと思うわ。
- A そうやな。船長みたいやな。なんやわからんようになったわ。
- B 私も水夫やと思っていたけれど、自信のうなったわ。
- C これはやっぱり、船長が「飛びこめ」と言ったところが一番だいじなところやと思うわ。
- D 「うつぞ。」もやと思うわ。

思考2 (あつめるバズの後のA児の考え)

はじめ、水夫たちが助けてやったことだと思っていたけれど、いまになってはっきりわかった。父がむすこを助けるために、「飛びこめ」と言ったことがだいじだと考えるようになった。父が「飛びこめ」というのが、この中心になっているのだと思う。

※ グループで話し合ううちに、自分の思考のずれに気づき、修正することができた。

◎おとうさんの助けたいという気持ちは、どこに強く表われているでしょう。

(ふかめるバズによって、見とおしをも)とに、くわしく調べる。……全体バズ



(話し合いのまとめ)

- このままだと、甲板に落ちて粉みじんになるし、飛びこんだとしても助かるとは限っていないけれど、他に助ける方法がないから「飛びこめ」と言ったのだ。だから少年をなんとか助けたいという気持ちが表われている。
- 11の段落から、助かってよかったという気持ちがわかる。

※ 児童の意識が「飛びこめ」のことばに集中し、助かった後の父親の心情追求が浅かったので、助かった後の心情を追求する課題を提示し、深めることにした。

◎少年が助かった時、おとうさんはどんな気持ちだったでしょう。

ふかめるバズによって、父親の気持ちを追求し、読みとりを深める。

グループバズ → 全体バズ

<実践例2> グループバズ(7分)

- D ぼくはうれしかったと思う。うめき出したと書いてあるけど、「うわっ。」と男が泣くのはよっぽどひどいことやないとかんやろ。それだけうれしいという気持ちがこめられていると思うんや。なきたいぐらいうれしいんや。
- B うめきだしているし、誰にもみられないように船室へかけこんでいるでしょう。だからやっぱり泣くぐらいうれしいのだと思う。
- A 自分のかけとったことがあたって少年が助かったということがうれしいのや。
- D 自分のかけにかかったということか。まとめた泣きたいぐらいうれしかったことやな。じっさい、泣いとうけどな。
- C 「人にみられないように、」というものはいっとなんちがうか。「とつぜん大きな声でうめき出

しました」をもっとくわしくしていると思うわ。

- A 「船室へかけこんだ」というところもうれしい気持ちや。へやの中にはいってからはもっていないと思う。甲板にいるよりも思いきりなけるもん。
- B 船室の方が泣いてもわからへんから落着いて泣けると思うわ。
- C 助かってよかった。みんな、ありがとう、という気持ちもあると思う。

※ 話し合いにより、思考が深まってはいるが、グループの話し合いだけでは深まり方が浅い。

<実践例3> 全体バズ

◎グループで話し合ったことを出し合ひましよう。

- E 人にみられないように船室へかけこんだという文からうれしい気持ちがわかります。
- F 水をはき出す前に死んでいたかもしれないに生きていたからよけいにうれしくて、泣きだしたいほどだったのだと思います。
- G 少年が飛びこんだ時のおそろしさも残っているのだと思います。
- H すごくうれしかったのだと思います。ほんとうは死ぬ可能性の方が多いかもしれないし、生きる可能性の方が多いかもしれなかったのでしょう。どっちになるかということで、船長はものすごく心がどきどきしていたけれど助かったからよかったという気持ちがものすごく表われていると思います。
- A ぼくはうれしいということをくわしくした文があると思います。それは「自分の船室へかけこんだのです」という文です。自分のへやへは行って人にみられたくないぐらい泣きた

いというのはうれし泣きがしたかったからです。

I 自分の方法で助かったのでしょう。もしその方法で死んでしまったらおとうさんは自分で殺したと思ってかなしむと思います。だから助かって、すごくうれしかったのだと思います。

J 今までIのようなことは考えていなかったけれどそんな考えもあるのだと思いました。

(以下略)

◎トルストイは何をいいたかったのでしょうか。

(各自、主題をまとめる。)

思考3 (A児がまとめた主題)

父は、むすこをどうにかして、うまく助けたいと思ったのだ。そして、むすこは父を信じて飛びこんだ。むすこがいきをふきかえたとき、泣きたいぐらいうれしい、助かってよかったと思ったところがいいかったと思う。

※ 見とおしを修正し、読み深めて、話し合ううちに、父親の深い愛情に気づいていった。

このように、グループや学級全体の中で話し合い、磨き合いながら、自分の思考のずれに気づいたり、訂正したりして、主題へせまっていくことができるようになった。これはバズ学習の成果であると思う。

今後の課題として、むだのない、質の高い話し合いを効果的にさせるためには、どのような手だてがたいせつか、さらに考えて深めていきたい。

# 第7回 全国バズ学習研究集会

## 自主性を育てるバズ学習

### — 学習態度について —

豊川市立千両小学校

丸 山 正 克

#### はじめに

学習理論といわれるものは、それなりの実験と臨床事例の中から生まれてきたものである。しかし、それが一つの理論になると、抽象化され具体性を失ってしまうので、現場に導入するのにかなりの抵抗がある。とりわけ、態度のようなエモーショナルな部分になると、理論的にはわかるが、具体的にはどうしたらよいか困るといのが事実であろう。

オールポートの態度形成のプロセスを考えてみると、自然発達の過程で態度形成は十分可能であると思われるが、より効果的に自ら態度形成に努力することが可能になるような方法について、ある種のシステムがあろうという前提に立って、一学期間実践をしてきたので、考え方と経過を述べて問題提起としたい。

なお、学習態度ということばをここで使っているが、学習については、子どもの学校生活、そこで活動することは全て学習であると考えている。また、態度というのは、それらの活動をより意欲的あるいは、目的にするためのエネルギーである。

したがって、学習態度というときは、教科指導とか生活指導の場ととかという使い分けをしていない。

#### I 実践の基本

日常実践は、教育活動である。その基本は三つの要素からなる一連の活動である。



これは基本的な考え方である。このサイクルに必要な要素として何が考えられるか、そして、それらを有機的にどう結びつけるかということについては、決定的な公式や方法はないまでも、より望ましいものがあるのではないか。

#### II 仮 説

子どもたちが自己を理解する場を設定し、そこで発見したものを目標として設定すれば、子どもたちの学習態度は変容するであろうし、その活動はスパイラル的に向上していくであろう。

#### III 実践と経過

##### (1) 目標の設定

目標というのは、突然、だれかが作るというものではない。たとえ、それが教師の手によるものであっても、子どもにとっては、自分たちが設定したものより価値の低いものであるといえそうである。(第3回発表要項 豊川市立中部小学校)

目標は、子どもにとって当面の課題であることが望ましい。子どもたちが、今なすべきことは何であるか。何が大切であるかを見出したり認めたりする必要がある。

目標は教師だけ知っていればよいというも

のでもない。子どもと共に作りあげてこそ、子どもにとって価値の高いものになる。それは、子どもたちが、自分自身で課題に気づいていく過程であり、自己評価であり、学習を自分のものにしていく過程である。

### 『学習記録』

自己評価の一方法である。時間割にしたがってその日の学習を全て記録をするという簡単なものであるが、継続的であるということと、人に頼ることができないという制約がある。

- (1) 自分のことを自分で記録することから、他律的な態度からの脱皮を期待する。
- (2) 記録することによって自己評価をし、フィードバックし目標の設定の足がかりとする。
- (3) より確実な記録をするためには、情報や援助も必要になるという意識の開発を期待する。

つまり、子どもたち一人一人が、自分はどうであるのかという自己理解の方法としてとりあげているのであって、記録という操作を通して、自己の目標に少しでも近づこうと努力することを期待しているわけである。

子どもの主体性とか自律性を期待をするとはいえ、必要なことは指導したり、知識として教えたりすることは当然である。

- (1) 学習記録を書く目的を説明し書くことを要求する。
- (2) 一週間は共同で書かせる。
- (3) 二週間めからは個人で書かせる。

そして現在に至っているが、「遊んでいたの、わかりません。」「ノートをとらなかったので、何をしたら忘れちゃった。」というコメントがつくようになった。非常に具体的な形で自己評価がなされるようになるまでには、多くの時間は必要としなかった。

「学習に参加するということは、自分の考えを発表することである。」という目標を設定したときには、既に子どもたちは、学習参加のあり方について、いくらかの自己評価がなされているので、具体的目標の設定はそれほどむづかしいものではない。

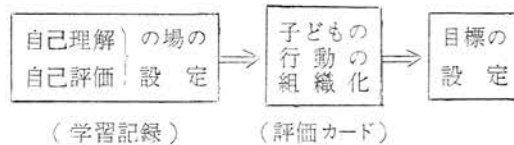
- (1) 学習記録を積極的につけようとする。
- (2) 発言の片寄りが目に見えて解消される。
- (3) 発言の競争からグループ内での協同場面が

あらわれる。

これらの意識の変容は、自分たちで目標の設定というところまで高められる。そして、目標に向って協調行動が見られるようになる要因を考えてみると

- (1) 目標の設定、行動の変容の必要性を発見できる場を設定した。
- (2) 要求したことに意味を持たせ、得たものを組織化した。

教師の一方的要求にとどまらないということが必要であるとともに、子どもたちから出たいくつかの要求を抽象化することなく組織することが重要な要因であろう。



### 『評価カード』

組織するという事は、形式を作ったり枠組みをめん密にしたりすることではない。子どもたちが高まっていくように、また、高まっていこうとするような意欲とか必要性を発見できるような場の設定をしたり、援助をしたりすることである。したがって、それは、ある段階を迫っている。

- (1) 発言カードと称して、曜日と時間のみ記入したものを渡し記録させる。

こういうものを子どもに与えると、必ずといってよいほど問題や要求がでてくる。

- (2) 二・三子どもたちの要求をとりあげて欄外に記入したものを配布する。

自分が行動の基準としてとり出してきたものであるため、かなり意識的な行動がみられる。

- (3) 子どもたちの要求と教師の要求をつきあわせて評価基準を作り子どもに与える。(現在)

評価基準の設定については、特につぎの二点に留意した。

- ① 一方的に教師の判断で決定しない。
- ② 完全実施主義で、どうせやるならということで詳細な基準はかえて子どもが混乱する。

子どもたちの態度は大きく変容したにも拘らず、アンケートをとってみると、「あまり役に立たない。」という回答がかなりでてきた。このことはいったい何を意味するのか、時間をかけて追求しなければならない問題である。

## (2) 学習経験の組織化

教師の方針や判断を前面に積極的におし出さないということは、子どもの学習の経験の組織化の一つの方法でもある。学習経験の組織化というのは、教師が組織化してやるのではなく、子どもたち自らが組織していく過程である。教師は、それを援助すべきである。子どもたちが目標を設定し自分たちで今までの経験を組織し目標を達成するという過程をさしているわけである。

### 『学習記録』

目標の設定のところでふれてきたが、自己評価は教科学習に片寄ったり、生活指導の一部で行われるべきものではない。

経験の組織化も一部に片寄るべきでない。学習というのは、子どもの学校生活での行動におきかえることを原則にしている以上、何らかの形で全てが組織化されるべきである。

組織化は、集団であるのか個人であるのかという問題もあるが、個人の活動を基盤にすべきであり、それをおぎなりにして組織化は存在しないと考える。

ここでは、個人が毎日の学習の結果をどうするのか何らかの形で再生し、自己評価することが組織化の方向であるという考え方をとっている。

重要なことは、子どもが記録することは、教師に対する評価であるという受けとめ方をすることである。そして、教師も敏感に反応する努力をしなければ組織化はできない。

### 『学習計画』

集団で組織化する方向である。ことばや理論としては簡単であるが、実際はかなり困難をもっている。

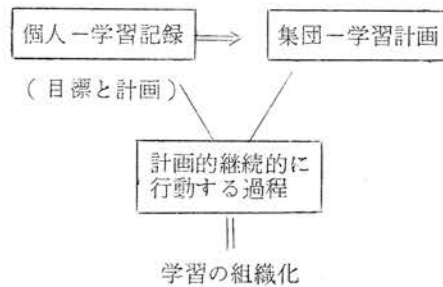
しかし、学習を組織化しようとするときにはあるプランにしたがって行動するほうがより効果的であろう。これは換言すると目標の連続であるとも言える。それを学習計画といって子どもにとり組ませている。

## (1) 課題分析

与えられた大課題、例えば商店はどんなはたらきをしているかという単元の課題から、今までの学習の経験から何を学習するのかということをはっきりさせるのが具体的なねらいである。

話し合いの中に自分の経験を持ち出し、みんなで総合して課題の形に作りかえるという操作、これは組織化にほかならない。

「何のために、何をするのか」というのは、目標の設定であると同時に、過程では、学習の経験の組織化が行われているとみるべきであろう。



計画を立てることに意義はあるが、それにしたがって実践することに学習の組織化のキーポイントがあるのではないか。集団での組織化は個人の組織化の結果である。いたずらに相互作用をさせることは、かえって落伍者を作る結果になる。思考のスピードの速いもののベースが優先するからである。

## (3) 評価

子どもたちの学習は評価の連続であるとも言える。「テストができた」「漢字がかけた」「まちがった」というのは、自己評価の結果である。

しかし、態度のように直接形になって現れない部分については、形成されたかどうか知ることはできない。行動をひき起すエネルギーの

ようなものであれば、表面に出た行動から推理することしか確める方法はない。

評価の大切さ、改善の必要性が強調されていても、いぜんとして理論的にも方法的にも混同としている。

少くとも、ランクづけをするための評価より子どもが持つ能力をフルに発揮できる場と意欲を引き出すための努力は続けなければならない。

また、子どもたち自身が、自らを指導する、自己指導の技術や方法を獲得することも含めて評価を考えなければならない。

### 『個人活動』

学校という集団、学級という集団の中で営まれるさまざまな学習活動は、個人に還元されていなくてはならない。教師が確認しておればよいというものではない。子どもたち一人一人が確認できていなければならない。

これまで述べてきた具体的な方法は、ある意味では評価の技術ではないかと考えている。

個人活動は、得たものを個人レベルで実践させてみようという試みである。ありきたりの言い方をすると「宿題」を自分で計画し実践するということである。計画をし実践をするという過程、ある目標達成のためのプランニングと実践ができるかどうかということを取りあげて自己評価させるということである。

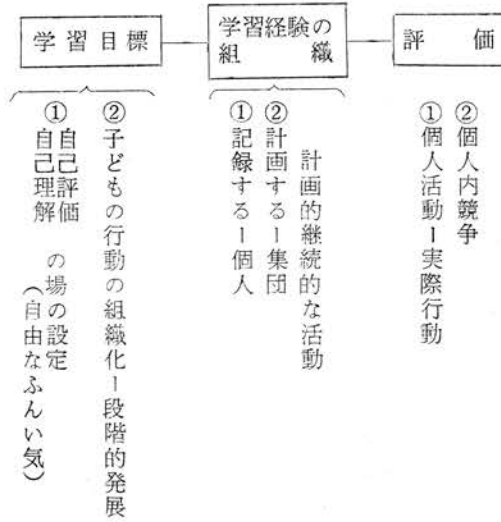
評価した結果、望ましい行動であればそれは強化されなければならない。したがって、結果は発表し認めてやる場を設定する必要がある。それを「朝の活動」といい、発表を全て「研究発表」とし認めてやる場を設定している。結果は、評価するより是認することの方が態度形成の上では重要な刺激となる。強化因子としては有効ではないかと思われる。

### 『個人内競争』

バズ学習の基盤は人間関係の形成にある。それは協調に代表される。評価活動はややもすると競争におきかえられがちである。競争を全く否定はできないが、協調が存在しなければ歪んだ集団を形成する以外の何ものでもない。競争という人間の基本的な心理を「個人内」にいかそうということである。「きのうよりも、前よりも進歩しようとする努力」を強調することで

ある。「わたしはこれだけ進歩したが、あなたは全然進歩していない」ここには、人間が元来持っている競争の心理に巧みに生かされることになる。「評価カード」は個人内競争の一方法でもある。記録しておくことは、自己評価し、個人内競争ができる必要条件である。

### ま と め



学習態度をつくるというのは、子どもの行動をどう意味づけてやるか、段階を追ってより高い目標を設定できるような場の設定に対応して形成されるものである。特に、段階を追って高められるということについては、教師のプランニングの大切さも必要であるが、教師を含めた学級集団の人間関係がよりよい方向を指向していなければならない。

# 第7回全国バズ学習研究集会

## 自主性を育てるバズ学習

—— 学習指導と生活指導の統合をめざして ——

新潟県刈羽郡刈羽村立刈羽小学校

酒井喜久司

### はじめに

昨年4月に現在担任している22名に接し、その実態(後述)から、学習指導面に小集団による話し合い活動を通して児童ひとりひとりの力を伸ばすことを試みた。

この研修は一学級の学級経営の一端であり、学校体制、あるいは地域体制による研修でないことは、多くの問題点を未解決のままに残していくことになった。それらの中で最も早急に解決しなければならないのが、小集団活動を通して学習指導と、生活指導を統合するということであろう。

### 一、主題設定の理由

#### 1. 教育の課題から

児童ひとりひとりの力を伸ばすということは教育の今日的課題の一つであることは誰もが認めるところである。ひとりひとりを生かすという第一歩は、まず児童を活動させることと、とらえその活動を生み出す場として設定したのが小集団による話し合い活動である。

生活指導面からとられた時の小集団活動を考えると、単なる仲よしグループ的な活動に終えることのないように考えた。

一つの課題解決にむかっている活動の中で、お互いの責任遂行と、お互いに認め合うことにより人間的なふれ合いを深めるという厳しさをもったふれ合いというものを考えた。

#### 2. 児童の実態から

児童数 男子11名、女子11名 計22名  
児童数の上からみると、よくバランスがとれ

体位の面から見ても特に差はない。

しかし問題になるのが学力の面、あるいは積極性、主体性という学習や生活態度をとりまく問題点である。ここでは生活態度的な面は観察によるもの、学力の面は48年3月実施の教研式学力検査により両者のちがいを示したい。

#### (1) 学力のちがい

各教科の男女の順位を見ると次のようになる。

○印男子 △印女子

#### 国語

1	2	3	4	5	6	8	9	10	
○	○	○	○	○	○	○	△	△	△
12			15			19	20	21	22
○	△	△	○	△	△	△	○	△	△

#### 社会

1	2	3	4	5			10			
○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	
13		14	15	16	17	18	19	20	21	22
△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△

#### 算数

1	3	4	5	7	8	9	10			
○	○	○	○	○	○	○	○	△		
12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
△	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△

#### 理科

1	2	3	4	6	7	9	10		
○	○	○	○	○	○	○	○	△	
11	14	15	16	17	18	19	20	21	22
△	○	△	△	△	△	△	△	△	△



以上のような結果を見ると4教科とも上位をほとんど男子が占め、残りを女子という結果がでている。この表は単純に得点順にならべたものにすぎないが、この学力の差(学力テストを学力と仮定して)を解消しないかぎり、ひとりひとりの力を伸ばし、お互いの価値を認め合い、高め合うという教育のねらいは達成できないと考えた。

## (2) 生活態度から見て

- ・男子をたよる女子
- ・女子を信頼しない男子

小学校入学以来メンバーは減ることはあっても増えることはなかった。その何年間かの生活の中でいろんな面におけるお互いの力を知りつくしているというのが実態である。

上の二つに代表されるクラスの雰囲気は、学習時においては、女子はわからなくてあたりまえ、学級会活動等においては、計画や指示は男子という実態を生み出していたのが、昨年4月時の実態である。

## 二、バズ学習運営の基本的な構え

### 1. 自分の考えをもって学習に参加すること

バズ学習は、人に助けってもらったり人の意見を一方的に受け入れる場ではない。たとえ断片的であっても、不十分なものであっても自分の考えをもって学習に参加しなければならない。自分の考えをもつことにより、他との比較ということも可能になる。その最少限の考えを気軽に、出し合えるのが小集団の話し合い活動である。

### 2. 自分の考えを拡大し、深める場である。

児童の思考がある時点でゆきづまった時、その児童はそのままの状態で一時間、あるいは一単元を終わらせることがある。そのような時に仲間との話し合いや意見の交かんを容易にしたのが小集団学習である。話し合いの中で解決の糸口を見つける者や、より確実に理解する者も

いる。

### 3. 小集団で結論を出すのではない。

話し合う内容によっては結論を必要とする時もあるが、多くの場合においてはひとりひとりの考え方は生きていることを念頭におかねばならない。

つまりバズ学習においては、常に自分の意見と比較し、批判し、受け入れ、主張するという活動がなされるべきであって、それらのものをまとめるというものではない。

### 4. 望ましい人間関係の育成をめざして

小集団であろうと、学習が行なわれる場は学級であり、その学級の成員によって構成された社会の中で教育が行なわれていると考えねばならない。そのような前提にたつと、学習のための授業というより真の人間教育をめざした授業の内容、形態がとられるべきである。

人間はその所属する社会で人格が形成されることが肯定されたら、その社会を教師のもつ望ましい価値体系に組み、さらにそれを児童と教師の共通なものとしていかなければならない。

## 三、指導の実際

### 1. 国語科の指導で

#### (1) バズ学習の基本を国語科で、国語科の基本をバズ学習で。

バズ学習を支えているものを技能的にとらえた時「聞く話す」の力であると言える。

逆に考えた時には「聞く話す」の技能修得の場はバズ学習にあると言える。

そのように考え、まず話し合いの技能を高めるといふ意味から「聞く話す」の技能を洗い出しその定着を図った。

[話し合いの約束]

○自分の意見を発表する時

私は～ 思います。その理由は～  
だからです。

- 質問する時
  - ・～君に質問します。
- 人の考えにつけたしをする時
  - ・～君の考えにつけたします。
- 賛成の時
  - ・～君の意見に賛成します。
- 反対の時
  - ・～君の意見に反対です。

上記のものはごく一般的なものであるが、これらが定着していないと、話し合い活動は成立しない。これらのことは国語科でその基本的な指導としておさえ、学級会や他教科でその修得をめざした。

#### 〔話し合いのかたち〕

班や学級全体で話し合う時でも人数の多少はあってもその形の基本型を次のようにおさえ、指導にあたった。

- 対入法 二人一組で話し合う。
- 輪番法 ひとりずつ順番に意見を発表する。
- 自由会話 司会者を中心に全体が自由に話し合う。

#### 〔司会者の育成〕

国語科における話し合い活動の単元は各学年とも年間一回程度である。その中で発表の方法も、型も、司会者の育成もということはほとんど不可能に近い。そこで本年度初めから、なるべく多くの機会をとらえて司会者の育成を考えた。

- 何を話し合うのか明確にする。
- 会議、話し合いの型をとらえ、それに合った進行をする。
- 発言しない人にも目を向ける。
- 発言内容のメモをわすれない。
- 発言内容の整理を心がける。

以上のように国語科の指導においては話し合い活動の基礎技能の修得に力をいれてきた。

## 2. 社会科の学習を通して

社会科におけるバズ学習を考えた時、どんな学習場面でどのようなねらいでその形態をとるのか明確にしなければならない。以下考えられるものを次に挙げることにする。

### (1) 協同調査の時

今までの実践場面ではこのやり方が最も多く見られた。多くの資料の中からねらいに即した資料を集め活用するということから、ひとりひとりがまず調べ自分なりの調査結果を持つという態度の育成に努めた。

このように、調べるという作業を通して、学習の方法、結果に対する自信を持ち始めたように思われる。

### (2) 協同作業

このことは説明の必要もないが、ひとりでやるよりも能率的な場面、たとえばグラフ、年表、地図の作成というような時である。

このことは学習効果を高めるという面よりも学級内の人間的ふれ合いを深めたということである。一斉指導時の児童の表情とこの時の表情、あるいは協力のし方は男女を問わずに生き生きとしたものが感じられた。

### (3) 集団討議

小集団学習というと話し合い活動により結論を……というのが通念であるように思われる。ある学習課題に対して解決までの計画、作業、話し合い、結果という形で始まったが今では児童の意見もあり、出された意見がそれぞれ妥当性をもっているものなら無理してまとめることはしない方向へ行っている。グループの中ではこういう意見があったというのが、班長の発表のようである。

以上の三つの形態をその単元の指導計画により、どこでいつということを考え授業を展開してきたが、指導面の強い指導学習とのかね合い等で残された問題点は多い。例として一単元を通した学習形態を次にのせる。

四、まとめと残された問題点

次	学習内容	時数	学習形態
一次 (工業生産のようす)	○わが国の工業製品 ・生産額の多い工業製品	2	○指導学習 ○小集団学習
	○機械工業 ・全般	1	○指導学習
	・輸送用機械	1	○指導学習
	・電気機械	1	○小集団学習
	・いっぱん機械	1	○小集団学習
	○金属工業	1	○指導 小集団学習
○化学工業	1	○指導 小集団学習	
二次 (中小工場の役わり)	○中小工場の役わり ・大工場とのちがいがい	1	○指導学習
	・中小工場の工業生産の中にしめる位置	1	○小集団学習
	・これからの中小工業	1	○小集団学習

※ここでいう指導学習とはどちらかと言えば教師が中心になって学習方法や内容の説明まで行なう授業方法であり、小集団学習はそれとは逆に児童中心になり、与えられた課題や、課題を見つけることから学習を進める学習形態を指す。

今までの実践をふりかえてみると、前者は単元の初めの部分に多く、次第に後者が多くなるという単元の指導になったように思われる。

もちろん一時間同じ形態で過ごすということではないことは言うまでもない。

1. 小集団指導とバズ学習の関係

この点については指導者自身が明確なちがいあるいは役割をもたなかったためか、あいまいな面が残ったが、あくまでも小集団学習の中のバズ学習というとりえ方で今後も進みたい。

2. 学習指導と生活指導の統合について

形の上での統合にとどまったが、学習している中にも、自己を高め合うというきびしさをもったふれ合いのある学級にしていきたい。それには、まず自分の考えをもつということ、集団内の責任を遂行するということを重視していきたい。

3. 話し合いの技能を高める。

集団内の話し合い活動をスムーズに運ぶ第一の条件である話し合いのルールなどについては国語科を中心に、その技能の定着と他の場面での活用を通じた高まりをねらっていきたい。

4. リーダーの育成

活動の核となるべき児童の力量は、グループの質の向上、あるいは学習成果の高まりという面に大きな力をもつ。平均化している集団内で核になる児童の少ない実態の中で確実にリーダーになれる児童を一人でも多くすることも重要な課題である。

現在 担任してから一年半が過ぎようとしている。多くの問題点をかかえた小集団学習であったが、標準学力テストの平均点の向上、あるいは、日々見ることでできる児童の変容を励みに明日からの実践にあたりたい。

## 第7回全国バズ学習研究集会

### すべての子どもを参加させ 理解させる創造的授業過程の研究

春日井市立東部中学校

#### 1. はじめに

生徒ひとりひとりの学力を高め、相互の人間関係を深めようとして進めてきたバズ学習への取り組みも、今年で9年目を迎え、全教師が前向きな姿勢で取り組み、共通理解のもとに学習を深め、同じ基盤に立ち推進してきた。

この間多くの問題点が提起され、研究が進み深まることによりさらに新たな問題点が生じてきた。これらの中には解決され再提起されたものも多い。一方、生徒増による学校規模の拡大化(本年は40学級、1614人、教員数62人)や毎年4月の宿命的な教師集団の異動は、お互いの共通理解に問題点を残している。

このような現状の中で、バズ学習について教師自身が共通の基盤を求めて、本年度は「バズ学習の原点にかえれ」の合言葉で研究体制の確立をはかることにした。

まず、今年度の研究の焦点をどこにおくかについて4月当初話し合い、昨年度の反省に立って今年度の研究を進めることを確認した。また、全教師が意欲的にできるような調査を実施し、研究主題を設定した。

#### 2. 研究主題

上の結果を総合して、本年度の研究主題を「すべての子どもを参加させ理解させる

創造的授業過程の研究」と決めた。

##### (1) 方針

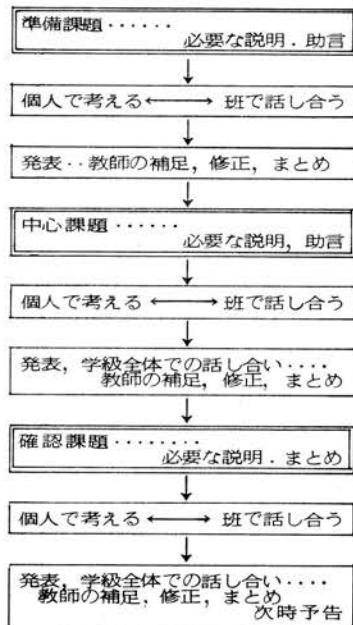
- すべての子どもを参加させ、わかりやすい授業を効果的にするために、これまでの「バズ学習」の研究をさらに深める。
- 全教師の共通理解のもとに、授業公開を中心として研究をすすめる。
- 短学活、その他日常の学校生活の場においても指導の充実をはかる。

##### (2) 具体的方法

- 研究会は毎週木曜日に開く。(全体会は原則として月1回)
- 学年別に指導目標・実践計画をたて研究の充実をはかる。
- 『バズ学習のてびき』の活用によって、学習面・生活面の体制づくりと深まりに役立てる。
- 学年部会・教科部会・全体会では1～2名が研究授業を実施(年間全員授業公開)し、課題、とりくみ方、評価、その他「わかりやすい授業法」について授業実践を通して研究を深める。
- 学年部会・教科部会と全体との調整をはかる。
- 少経験者の研究会、授業交換、短学活の参観を全校または学年ごとに随時計画し実践する。

### 3. 主題にせまるために

- (1) 学習への体制づくりの確立
  - 生徒にも理論を
  - 班編成の意味とその方法
  - 班長とメンバーの機能
  - 教室の環境
- (2) 意欲的な学習参加への教師の手だて
  - 学習意欲を高める要因（満足感・集中度・積極度・意味感・帰属感・競争と協力）があり、これらのいくつかを授業の中に意図的にとり入れていく。
- (3) 教材の精選の大切さ
  - 豊富な教材研究をもとに、目的達成のためには何が柱になるのかを精選し、組立て、順序立てる。
  - 生徒の関心、能力などを考慮し、その教材を通して生徒が主体的に活動できるようにする。
- (4) 授業の組織化のための教師の指導性
  - バズ学習をめざす態度的目標を達成するために、教師の留意すること（協調・積極性・競争と協力など）。
  - すべての子どもがわかるための課題の内容・提示の方法。
- (5) 一般的な学習の流れ

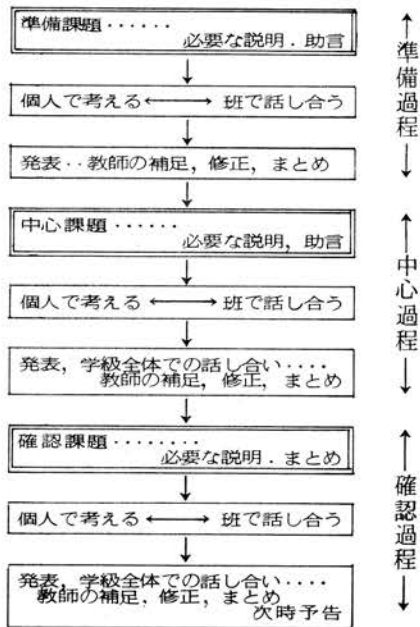


	教 師	生 徒
授業以前	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 次時学習予定を指示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 前時学習事項を短学活で確認</li> <li>● 家庭で復習、予習課題の調べ、次時の準備</li> </ul>
準備過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 班学習の状況を確認</li> <li>● 前時学習からの質問への解答</li> <li>● 本時の学習主題、学習の見通しを明示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 始業合図と共に、班学習開始（予習の確認、解る所迄を明らかに疑問点の出しあい）</li> </ul>
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題への考え方、糸口、資料の見方を助言</li> <li>● 班の発表内容の問題点を整理把握させます。</li> <li>● 学級全体への問い掛けと説明 本時学習の中心へ迫るための基礎的思考の整理と統一</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各自が教科書、予習ノート、資料を基に課題と取り組む。</li> <li>● 班内で自分の考えたことの出し合い、発見、思考の深化</li> <li>● 幾つかの班から発表</li> <li>● 学級全員が自分の、班の考えたことと対比させて聞き集団思考へ</li> </ul>
中心過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題を解り易くください、何を考えるのかを明らかにし、準備過程での基礎的思考とのつながり、発展を示唆</li> <li>● 机間巡視</li> <li>● 課題と思考のずれはないか、あれば問い直す。</li> <li>● 各自各班の思考結果と対比させ聞きとらせる。</li> <li>● 学級全体への問い掛け 本時学習の中心に迫ったことに気づかせる</li> <li>● 基礎的重要事項を整理、関連づけ、中心をはっきりとあげて説明、発表への評価も含めて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各自教科書、予習ノート、資料を基に課題と取り組む。（予習段階での疑問、問題点、準備過程での集団思考上での再発見を手掛りとしながら精一杯考える）</li> <li>● 班毎に班長の合図で話し合い、1人が発言、皆で聞く 討論＝「良いのか、違うか」「どこが違うか」「何を付け加えるべきか」「何を修正すべきか」「資料はどこにどんなものがあるか」「どこが解らないか」「どこを認めるか」「班の結論は」</li> <li>● 個人の思考がバズを経て小集団思考へ</li> <li>● 別のいくつかの班から発表</li> <li>● 学級の話しあい</li> <li>● 本時の学習で「何が最も大事か」をつかむ</li> </ul>
確認過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中心課題を学んだ上立って、解題、転移、応用、発展的課題に眼を向けさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中心課題を解決した力でもって、その発展として「何ができるか」に取り組む。（調べ、考え、解き、話し合い、まとめ）</li> <li>● 班発表、個人発表</li> <li>● 本時復習課題、次時予習課題の確認</li> </ul>

- (6) よい課題の条件
  - 指導目標達成のための手がかりとなるもの。
  - 単元や題材の中での位置づけが明確なもの。
  - 適度な困難度を持つもの。
  - 高度の段階への発展性のあるもの。
  - 興味を喚起できるもの。
  - 多くの生徒に解決できるもの。
  - 限られた時間内にまとめられるもの。
  - テキストなどの資料により解決することができるもの。
  - 単純化したり、まとめやすくしやすいもの。

### 3. 主題にせまるために

- (1) 学習への体制づくりの確立
  - 生徒にも理論を
  - 班編成の意味とその方法
  - 班長とメンバーの機能
  - 教室の環境
- (2) 意欲的な学習参加への教師の手だて
  - 学習意欲を高める要因（満足感・集中度・積極度・意味感・帰属感・競争と協力）があり、これらのいくつかを授業の中に意図的にとり入れていく。
- (3) 教材の精選の大切さ
  - 豊富な教材研究をもとに、目的達成のためには何が柱になるのかを精選し、組立て、順序立てる。
  - 生徒の関心、能力などを考慮し、その教材を通して生徒が主体的に活動できるようにする。
- (4) 授業の組織化のための教師の指導性
  - バズ学習をめざす態度的目標を達成するために、教師の留意すること（協調・積極性・競争と協力など）。
  - すべての子どもがわかるための課題の内容・提示の方法。
- (5) 一般的な学習の流れ



	教師	生徒
授業以前	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 次時学習予定を指示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 前時学習事項を短学活で確認</li> <li>● 家庭で復習、予習課題の調べ、次時の準備</li> </ul>
準備過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 班学習の状況を確認</li> <li>● 前時学習からの質問への解答</li> <li>● 本時の学習主題、学習の見通しを明示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 始業合図と共に、班学習開始（予習の確認、解る所迄を明らかに疑問点の出しあい）</li> </ul>
準備過程（導入）	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題への考え方、糸口、資料の見方を助言</li> <li>● 班の発表内容の着眼点を整理把握させます。</li> <li>● 学級全体への問い掛けと説明 本時学習の中心へ迫るための基礎的思考の整理と統一</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各自が教科書、予習ノート、資料を基に課題と取り組む。</li> <li>● 班内で自分の考えたこととの出し合い、発見、思考の深化</li> <li>● 幾つかの班から発表</li> <li>● 学級全員が自分の、班の考えたことと対比させて聞き集団思考へ</li> </ul>
中心過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題を解り易くくさき、何を考えるのかを明らかにし、準備過程での基礎的思考とのつながり、発展を示唆</li> <li>● 机間巡視</li> <li>● 課題と思考のずれはないか、あれば問い直す。</li> <li>● 各自各班の思考結果と対比させ聞きとらせる。</li> <li>● 学級全体への問い掛け 本時学習の中心に迫ったことに気づかせる</li> <li>● 基礎的重要事項を整理。関連づけ、中心をはっきりとりあげて説明、発表への評価も含めて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各自教科書、予習ノート、資料を基に課題と取り組む。（予習段階での疑問、問題点、準備過程での集団思考上での再発見を手掛りとしながら精一杯考える）</li> <li>● 班毎に班長の合図で話し合い、1人が発言、皆で聞く 討議＝「良いのか、違うか」「どこが違うか」「何を付け加えるべきか」「何を修正すべきか」「資料はどこにどんなものがあるか」「どこが解らないか」「どこを解るか」「班の結論は」</li> <li>● 個人の思考がバズを経て小集団思考へは問い直す。</li> <li>● 別のいくつかの班から発表</li> <li>● 学級の話しあい</li> <li>● 本時の学習で「何が最も大事か」をつかむ</li> </ul>
中心過程（展開）	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中心課題（本時の学習内容の本質＝指導目標へふれるもの）を指示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各自教科書、予習ノート、資料を基に課題と取り組む。（予習段階での疑問、問題点、準備過程での集団思考上での再発見を手掛りとしながら精一杯考える）</li> <li>● 班毎に班長の合図で話し合い、1人が発言、皆で聞く 討議＝「良いのか、違うか」「どこが違うか」「何を付け加えるべきか」「何を修正すべきか」「資料はどこにどんなものがあるか」「どこが解らないか」「どこを解るか」「班の結論は」</li> <li>● 個人の思考がバズを経て小集団思考へは問い直す。</li> <li>● 別のいくつかの班から発表</li> <li>● 学級の話しあい</li> <li>● 本時の学習で「何が最も大事か」をつかむ</li> </ul>
確認過程（整理）	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 確認課題（発展的課題を提示）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中心課題を学んだ上立って、解認、転移、応用、発展的課題に眼を向けさせる。</li> <li>● 中心課題を解決した力をもって、その発展として「何ができるか」に取り組む。（調べ、考え、話し合い、まとめ）</li> <li>● 班発表、個人発表</li> <li>● 本時復習課題、次時予習課題の確認</li> </ul>

#### (6) よい課題の条件

- 指導目標達成のための手がかりとなるもの。
- 単元や題材の中での位置づけが明確なもの。
- 適当な困難度を持つもの。
- 高度の段階への発展性のあるもの。
- 興味を喚起できるもの。
- 多くの生徒に解決できるもの。
- 限られた時間内にまとめられるもの。
- テキストなどの資料により解決することができるもの。
- 単純化したり、まとめやすくしやすいもの。

## 4. 実践の中で

### (1) 課題

課題とは、その教材の指導目標と生活の学習活動の間において、思考、問題解決等の働きや知識技能の定着をうながすものである。よい課題の条件は前に記した通りだが、多くの実践は、課題そのものが授業を左右する力があることを示している。

#### 〈研究例と問題点〉

ア. 意欲的に「話し合い」にとりくませる課題のあり方 (社会科)

- 生徒の生活に密接しているもの、わかりやすい具体的なものを資料として活発な話し合いを組織する過程で、課題の本質に迫ることをめざした。

#### • 問題点

学習意欲を高めるために課題の内容や提示方法が重要であるが、生徒の生活経験に根ざしたわかりやすい課題の時は話がはずみ、教室全体が生き生きするが、話し合いが本質にせまろうとする所でのつまづきが目立つ。

イ. 積極性、持続性をもたせる課題の提示。(体育科)

- 単調になりがちな長距離走で個人のペースを記録表に記入することにより目標タイムの設定と到達のためのペースを各自に作り上げさせた。

### (2) 評価

より多くの生徒を意欲的に学習に参加させるための評価の方法にはいろいろあるが、どんな時、どんな形でという配慮と、内容や形式を考えた評価でなければならない。そこで、今年度は学習過程(授業の流れ)の中での評価の問題点を追求することにした。

本時の目標には、認知的(知的理解面)な目標と、態度的(活動、聞き方、自分の考えをまとめる等)目標とがあり、その目標に到達するための課題、それに対して到達までの過程における評価と、どこまで目標に到達できたかという認知面

の評価は、欠くことのできないものである。

#### 〈研究例と問題点〉

学習意欲を高める手だてとしての評価のあり方。(技術科)

#### • 問題点

本当はわかっていないのに、班で話し合いをすればわかったような気になる生徒がかなりいる。「わかったら聞いてみよ」「やってみよ」等相互評価はさせるが発見しにくい、どうすれば真に意欲的にとりくませるかを探りたい。

- 体育科、技術・家庭科などでとりくんでいる満足度、充実感、帰属感などは評価と関連が深い、学習結果の評価が次への意欲につながるような評価はどうあるべきか。

### (3) 意欲づけ

○ 意欲をもたせるには

- 欲求を喚起するような課題の提示。
- 目標を保持し達成するまでは目標を他にそらせまいという意志、態度。

目標の転換を拒否する意志の強さは性格特性(主体の淡白、気の変わりやすさ)や、対象に対する価値判断や魅力にある。困難さ、つきあたりなどにより、学習が進まないと心理的緊張状態(不快、不満、失敗のおそれ)となり、これの克服、成功によって満足感が生まれる。

このような経験の反省によって試練に対してやりぬく意志的行動の強化となり学習意欲を育てるものである。

○ 学習意欲と態度

- 話し合いを深めるためにきびしさをもった人間関係が必要である。
- むだ話をなくすため、相互作用をさせる時の約束や、話し合いのきまりが徹底されるべきである。
- 課題の難易にもよるが、時間はみじかくはやくしてむだ話の余裕を与えない。
- 誤答も学級の宝だ。

#### 〈研究例と問題点〉



- OHPを使った授業実践
- (ア) 適切な討議資料の提示
- (イ) 効果的な発表のための資料
- (ウ) 板書時間を短縮する資料
- (エ) 説明の道具としての資料
- (オ) 復習時間の短縮の資料
- (カ) OHPの特性を生かした実験

- 問題点

OHPによる授業は、直感的に「わかった」と思い込みやすく思考がはたらかない場合がある。真の知識として、定着させるためには、どのような指導のてだてをすればよいか。

## 5. 今後の問題点

学習を一層効率的に発展させるには、学習過程の研究を進めると同時に、学校生活のすべてにわたって統合化をめざし実践されなければならない。従って問題点も多面にわたって提起される。はじめに述べたように研究9年目ともなると、誰しも高い次元への深まりを感じとるであろう。しかしながら4月の定期異動のたびに、教員構成も大きく変化した。そこで原点にかえっての問題が多く、教師のバズ学習に対する体制づくりから再出発しなければならない。

### (1) 授業の中から

- 話し合いの中味を深めるためにどうしたらよいか。
- 1時間の授業の中でのバズ活動の位置づけ。
- バズ学習入門期における具体的指導プログラム。
- 1時間の授業の中でどのように即時評価を組み入れていくべきか。
- 班内での能力差の問題。
- 無駄話、依頼心、きびしさの問題。
- 生活経験に根ざしたわかり易い課題については生き生きするが、本質にせまる段階でつまづきを見る。
- わかったような気がする、実際にわかったかわからないかを発見し、意欲化をはかるにはどうしたらよいか。

- 学習結果の評価が次への意欲につながる評価はどうしたらよいか。
- (2) 学級会活動から
    - 効果的な班編成。
    - 約束ごとが守れない生徒の指導。
    - 話し合いを行動に移すには。
  - (3) 短学活から
    - 班長指導が徹底されていない。
    - チャイムの合図で活動が開始されない。
    - 短学活における生活バズの位置づけと短学活と家庭生活とのつながり。
  - (4) 特殊教育
    - 根気がなく自己中心的な生徒に、バズ学習を通して社会性をどのように身につけさせるか。
  - (5) その他
    - バズ学習と生活バズをどのようにかね合わせていくべきか。
    - バズ学習といえば、何んでも話し合うかのように錯覚されている。

## 6. おわりに

すべてのこどもを学習に参加させよくわからせるための研究へふみ切ったのであるが、よい学習というものは、

第1に、授業へ参加させることである。そのためには意欲づけが問題となる。

第2に、目標にせまる課題と評価を考える必要がある。更に1時間の授業の流れにおける課題は、教材研究と教材の精選から生まれるものである。

第3に態度づくりである。

バズ学習は認知と態度の両輪ですすめられるものであるが「態度」の面は学習の場のみで形成されるものではなく、生活のあらゆる場で生徒は身につけていくのである。その中には、望ましい態度の促進にマイナスの要因となるものも多くある。このマイナスを除かなければならない。

私たち全教師がバズ学習の基盤に対しての共通理解を持って、これまで蓄積されてきた理論と実践をふまえ、理論のみにとどまらず強力な実践を続けたい。

## 第七回バズ学習研究集会

# バズ学習と学習指導

滋賀県神崎郡五個荘小学校

石 部 清 和

### 1 合理的な実証授業の体験と その後

昨年度(昭和48年度)は第6回全国バズ学習研究大会が私どもの学校を会場で行われるという機会に恵まれるとともに、今一つ名古屋大学のご指導による合理的な実証授業の研究を行うことができた。

これらの体験は、バズ学習の研究結果を整理し、バズ学習を行うことによって得られる効果や、また、バズ学習がうまく行かない場合のいろいろの原因や対策といったことの反省という両面について極めて深く考察することの出来る機会であった。

しかし、一面このような大掛りの実証、条件を整理しての研究は平素の私どもの地方の学校では容易になし得ることではない。これは何らかの方法で、私どもの平素の体制の中で研究と実証を可能にしなければならないと前記の大会修了後、私どもの間でひそかに考えられていたことなのである。

年度の変わりによって二つの事態が生じた。それは、一つは人事異動により職員の更迭があって新しい職員メンバーを迎え、「バズ学

習とは何か」という新しい説明が必要になり次に新年度には、本年11月に県国語教育研究発表大会を私どもの学校で開催し、本校の授業を公開し、特にバズ学習の成果についても発表をしなくてはならないということになったということである。

このような二つの事情は当然私どもが一応マスターしたと考えるバズ学習について、一つは本校の新しい職員により力強く説明する必要があったとともに、国語指導という限られた部門の中で再吟味し、県内多数の国語をプロパーとする人たちの要請にも応えたいと考えたわけである。

### 2 バズ学習の再認識と私の仮説

新しく本校に迎えた同僚やその後の近隣の学校でのバズ学習の受止め方をただしてみるとさまざまな誤解があるように思われた。

このことは、私どもの学校でも稍もすれば踏み誤るおそれのあることなのである。

即ちバズ学習とは、話し合うこと——それを学習の過程の中に折込めばよいと安直に考

えられることであった。このことは、どの学校でも最近よく見かけることであり、これはあながち全面的に否定すべきことではないと考えられるが、若し一方法として安易にバズが行われているとすれば、その教師の学習指導は必ず全体が安易に流れるというか、終りには学習指導そのものに行詰りが来るのではないかと予想されるのである。

そこで私は、私なりの考えと立場でこれから行う私のバズ学習に次の様な仮説を立ててみたのである。

### (1) 学習課題の想定

ア. 教材を文化的、価値的立場から捉え題材観としてまとめて見る。さらに子どもの立場で、その発達と既習の経験の想定により眺めてみる。また指導の方法上、難易、順序など考えて見る。

以上の三つから課題の構想を想定し、さらにこれらを分析して分析課題を作る。

- イ. 子どもとともに学習の見直しを行う。
- ウ. 個人学習の手がかりを与え、時間毎にも個人思考の時間をつくる。
- エ. グループ学習にはめあて、方法をはっきりさせて行わせる。(グループバズ)
- オ. 全体バズ——学級全体の学習として行う。
- カ. まとめ——学習の補足、修正、一般化確認の操作を行い、必ず次時の予測をさせる。

以上は極めて普通の過程であるが、日々の実践になると教材によって、児童の状況によって種々考えさせられることも多い。

## 3 実践上の問題点

### (1) 学習課題はどんなにして作られるのか

学習の全過程から見て、好ましい課題が作られているかどうかは、子どもにとっても教師にとっても極めて重要なことである。また時間ごとにその日のめあてが示されることも生き生きとした学習をさせる基本的な条件の一つであり、子どもが主体的に取り組む上で必要条件でもあろう。

#### ○ 指導計画上の課題

私はこれを次のような観点から作ることにしている。先ず確かな教材観を持つことである。それには教材の系統性を抑えることと、その系統的内容が、子どもの発達と生活的な既往の経験からどのように位置づけたいか、ということである。その二つの立場を統合したものから——この教材では何をつかませるのかをしぼる——それを確かにつかむことが教師として持つべき最大の課題であろうと思う。私どもの学校ではこうして教師が求めた課題を大課題と呼んでいるが、これが分析されていくつかの分節課題ができ、指導という考えに立って構造化されたものを指導計画と考えている。

指導計画は、やがて具体的な指導、特に最初に行う「学習の見直し」の時間で子どもの「学習計画」に変わる。昨年度の実証授業に於いても実証されたが本年度の5年生の場合、課題に対する態度が86.3%と課題意識はかなり高く満足すべき結果を見たのである。これはあくまで、教師の指導によって「子どもの見つけた課題」になることが望ましいわけである。

### (2) 個人思考を深めさせる助言

バズ学習の基礎となるものは個人学習である。バズ学習の一般的な過程として必ず個人思考、グループ思考、全体思考の3段階を経

ることになっているが、最初の段階の個人思考がどの子にも能力に合い、学習態度の出来、不出来にかかわらず、なされているということは、全学級の学習を成功させるかどうかの鍵であろう。それには個人で考える機会とヒント等が、適宜に与えられなければならないが、私は学習の終了前に次の課題への構えるべき、子ども自らの予習の学習の案内、また帰りの会を利用して、家庭学習へのヒントを与える。授業の最初に個人学習を持つ時は、「予想の立て方」「見通しの吟味」という形で個人思考の手がかりを与える。もちろん個人学習に入った時は、自ら自分の力の限りをつくし、ねばり強くやる態度は大切である。例えば6年生の比例の問題に於いて、「この比例の学習を進めるとどんなことがわかるのだろうか」と言う。学習への期待をもたせ、課題である「1. 父と子の年齢表と 2. 水槽に入る水の量と時間の表を比べてそのちがいを考えよう」を示し、個人学習をさせるが、比べる、変化のちがいに視点を置いて学習することになる。あるグループのU児とM児の場合、「増える」としていても「増え方についての見方が異質である場合など、個人学習の段階では大切に育て、やがてグループ思考を高めるための、素因とするわけである。

### (3) グループ思考の活発化

個人によって確かに得られたものは、未熟であったり、問題点が多いということ。「バズ学習の常識」として子どもたちに自覚させる。このことも、バズ学習の訓練である。「だからバズをするのだ」という構えがでてくるのである。またバズに入る前に時には、1～2分の沈黙によって自分の考えを整えてから始めるのも実に大切なことである。バズが

稍もすると、安易な輪番式の発言になり、形式的になったり、討議がなされないことが多いが、それではバズではない。正しくバズを行うためには、グループ全員が自分の考えと他の人との違いを敏感に見出す努力——で終始するという態度が必要である。バズの中味を見ているとM児は、1と2の表の増え方の違いを指摘しているのに対し、U児は増えることのみを見て正比例だと述べている。この二つの考え方のちがいを、グループの他児が発見し、「どうふえているのか、差はどうか、時間の変化で水がどうなのか」まで話し合うことができた。また5年生の「野菜サラダの材料のまぜ方」に於いて、2つの量の多少を比較する時、差で考えている子どもと、比の考えでとらえている子どもとがあり、グループでは両方とも正しいと見ているが、どちらがよりよいのかということになると、グループでは、そこまで解決できない。そこで全体バズで発表し、修正され、なっとくのいく説明をきいたり討議することになる。ただグループバズが、機械的に行われていると、いろいろの異なる意見が、はっきりされなかったり、また違い等の取り扱いがぞんざいになる恐れが少なくない。私どもがバズ学習をとり上げているのは、特に小さくても、異った意見を見つけるとか、違った考えについては、どこで間違っているのかを見つめることが大事であり、相手の立場を尊重しながら、小さな細かいことに着眼できるグループに育てたいと考えるものである。

### (4) 全体思考

グループバズに於いて、自分の考えが認められなかった子や、問題点として未解決になっているグループでは、全体思考の場で、

各グループから活発な意見が出されて、総括的に検討されると、U児・M児の場合に於いても、自分の考えのどこが正しくて、どこが誤っているのかを見つけ出すことになる。学級全員が、自分の考え、グループでの話が、全体での広い場での討議ではじめて具体的な問題の解決を知ることになる。そこにその時間での学習の山場を体験するわけである。そしてこの流れの中で、横につながる強いきずとなる人間関係を知り深めていくのであるが、それは常に、「わからない時はみんなにたずねる」「人からたずねられたら親切に答える」その二つの基本姿勢が全員にみまぎっていないければならないのである。

#### (5) 学習の確認

これは教師の重要な役割である。修正・補足・まとめ・一般化——即ち確認のことである。また特に学習取得下位群に対する教師の細かい配慮も必要であるし、今一つ次時への予測も考えておかねばならない。これらのことは3、4分程度のことであるが、短い言葉で多くの内容を表現し——各人の個人学習の誘因となることを心がけなければならない。

#### 4 われわれの授業実証

昨年度私どもの学校では、実に合理的な、しかもかなり大がかりな授業の実証的研究の経験を持つことができたがこれは、効果的な学習指導として、共通的原理を具体的に見出す方法として、実によい研究だと考えている。しかしこれは平常の懇制の中でこそ考慮され工夫される必要があると思われるので、以下の諸点についてのみ重点的に確認して実証し、研究を進めたいと考えている。

#### (1) 全校的な授業実証

指導計画案の共同作成

特に課題作製には十分な検討を行う。

指導過程に留意し、器機の導入、学習の重要ポイントの確認と山場の予想、事前予備授業と検討(同学年他学級にて)

授業観察及び記録の分担

児童調査として、参加度・満足度の調査、事前事後のテスト及び把持テスト。

授業分析結果の研究協議会を持つ。

#### (2) 学年及び自己学級では

子どもは課題を十分は握し意識づけられたか。

学習の見通しは得られたか。

個人学習(個人思考)は十分なされていたか。

バズは効果的であったか。(即時評価)

子どもの個人発言、グループ内発言、全体バズ発言の変化(ノートの記録も)を観察(抽出して)する。

子どもの自己評価の記録をさせる。

課題解決の予想、個人学習のできぐあい、バズでの話し合い程度、全体バズへの参加、最後に理解できたか、今の学習についての反省等記入。

これらの研究実践の結果は、再び詳述しなければならないと考える。